※本作品は以下のカップリング要素を含みます。
すべて大丈夫な方のみお読みください。

新九郎　×　珠闘麗斗

愛琉志　×　惣輔

潮　×　空太

左門　×　祐

※あと長いです。50ページあります。

【一月　卯花惣輔と長万部潮の場合】

夕飯を手伝う、という珍しい申し出に、惣輔は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに優しく微笑んで受け入れた。

不慣れな割烹着姿を身にまとい、慣れない手つきで野菜を切る。時折本能的に手が伸びそうになるのか、思わず口元を緩めてしまうのを慌てて抑えてぐっと手に力を込める。そんな後輩の様子を、汁物を煮込みながら様子を見て微笑んだ。

「…惣輔先輩がいなくなっちゃったら、もうこのご飯も食べられなくなるんだなぁ」

一通りの準備がすんだ少し一息ついたところで潮がぽつりと呟いた。その目線は今まさに下準備が終わり、温めさえすればすぐにおいしく食べられる食事へと向けられている。

「そのときに備えて、残り僅かな期間だけでも、炊事を教えてやるべきだな」

胸の中を通り過ぎる切ない想いにはそっと目を逸らし、惣輔はそう返事をする。

卒業のときが近づいていた。

潮が今日突然、夕飯の手伝いをなんて申し出たのもそんな理由からだろうと思っている。食欲旺盛で、何よりも食事を楽しみにしていた後輩。付き合いとしては一年弱でありながらも、どんな食事もおいしいおいしいと顔を綻ばせて食べていた姿を見れなくなるのは惣輔としても寂しいものがある。

「…卒業しても、黒玉寮にはたまに遊びに来てくださいね」

「遊びに来てと言いながら、実際は食事を要求するということか？全く困った後輩だ。そろそろ、自立してもらわねばだぞ」

「う…、それはもちろん…卒業後も惣輔先輩のご飯が食べたいのは事実ですけど、でも、それ以上に、やっぱり寂しいじゃないですか」

潮は図星を突かれたかのような顔をしつつ、割烹着の端をぎゅっと掴む。

本心から寂しそうな顔をしたのを見て、からかいすぎたかもしれない、と惣輔は心のなかで少し反省をした。

「…卒業というのは、区切りだ。俺とて、お前たちと離れるのはもちろん寂しい。しかし…」

心の中のざわめきを抑えながら惣輔は言葉を続ける。

「人生には…そういう、区切りも必要なんだ。終わりがあるからこそ、出会いが素晴らしいものになる」

こうやって後輩に何かを諭すのもあと何度だろうか、とふ

と考える。このように何かを諭してやるのを、この高校に入学してから一体何度行ってきただろうか。そして、それは特に、特定の人物に多く行ってきた気がする。

そしてその人物と、自分との区切りも、やがてやってくる。

「区切り、か……」

潮は惣輔を言葉を反芻ながらぽつりと呟いた。相変わらず割烹着の端をぎゅっと掴んで何かを思案している。

掴んだ場所からシワができている。

「ずっと、聞きたかったことがあって」

「どうした、改まって」

掴んだシワが、深みを増す。

「…愛琉志先輩と惣輔先輩は、やっぱり、卒業後も一緒に居続けるんですか」

遠慮がちに上目遣いをしながらそう問いかける潮に、思わず惣輔は固まった。潮からそのことを聞かれるとは想像もしていなかったのだ。

「…どうして、そんな質問を」

「ふたりって、すごくいい関係を築いているなぁって、ずっと思ってて」

窓から差し込む夕日が潮の顔を照らしている。

「自分や空太が入学したときから、ずっとこう、自分たちを二人で見守ってくれてたじゃないですか。ふたりとも、本当に、自分たちの保護者代わりだったというか」

「……」

「そういう…二人の絆というか、そういう関係って、やっぱり、三年間かけて築き上げてきたものなのかなって…。それで、その絆は、卒業後もあり続けるのかなって…。そういう絆を、自分は……」

自分は空太と築けるだろうか。

そう言いかけた言葉は潮の中で飲み込んだ。

いつからだろうか。愛琉志と惣輔が、事ある毎に互いに顔を見合わせ微笑む瞬間を羨ましいと思うようになったのは。その瞬間というのはいつも、自分たちには入り込めない、なんなら、自分たちより一年付き合いの長い新九郎でも入り込めないもののように感じていた。

相棒というべきか、夫婦のような、と言っても差し支えがないかもしれない。

喧嘩をしている様子も全く見たことがない二人の姿。

「……絆、か。まあ、俺と愛琉志はこの寮で三年間同じ部屋で過ごしてきたからな。さすがにお互いのことはよくわかっているが」

入学した当初から今に至るまでの愛琉志とのことを思い返しながら惣輔はそう返した。

潮の言わんとしていることは伝わっていた。潮が空太に対して単なる友情だけではない感情を抱いているのであろうことは察していた。いや、正確には、おそらくそうだろうという見立てを愛琉志がしていたのだ。

羨ましいと思っているのだろう、自分たちのことを。

気がつけば隣にいるのは当然になっていた。喜怒哀楽を素直に表現し感情の振り幅の大きな彼を、ときにはありのまま感情に素直にさせてやり、ときには暴走するのを諌めてやるのが自分の役目だった。それを負担などと思ったことはない。あるがままに感情表現を顕にするのが苦手な自分と、対照的に表現をする愛琉志。それでいながらきちんと周囲を見て空気を読み、場がきちんと良い方向に収まるように振る舞うのもまた愛琉志だった。

それをフォローしそれとなく見守るのが自分の役目だった。そこが互いにバランスが取れていたのだろうか。防衛部の部活でも二人は確かに、後輩たちを見守り導く保護者のような存在になっている。

「卒業後は…一緒にいるかは、まだ決めていない」

「えっ、そうなんですか…？」

惣輔は専門学校への進学が決まっており、愛琉志はまだ定まってはいないが、芸能系の仕事で声をかけられている。

心のざわめきを隠すように、惣輔は潮から目を逸らし、必要もないのに鍋の蓋を開けてお玉でかき混ぜた。

「卒業と同時に別れる、とかなんて…考えてないですよね？」

「まさか、そんなことは考えてはいない…あくまでも俺は、だが」

気がつけば手を取り合い交際を始めてからはや数年。

隣にいるのが当たり前すぎて、目の前にある別離の可能性など考えていなかった。でも、この黒玉寮も、卒業と同時に出なければいけない。

進学先は実家からそれほど遠い場所ではない。親からは一人暮らしをするでも実家から通うでも構わないと寛大な言葉をもらっているが、これからも生活費と学費を負担してもらうのは忍びない気持ちもある。

そして、愛琉志はどうするつもりなのか、ここ最近はなんとなく互いに聞き出せず距離すらできていた。

「差し出がましいこと言ってたらすみません…。自分は…二人の関係に、勝手に憧れてたんで…」

同じ寮で同室で暮らす者同士という共通点が、潮と空太、愛琉志と惣輔にはあった。この1年弱もの間、空太と過ごす中でほのかに芽生えた友情とは言い難い感情は、この先輩たちへの憧れへと繋がった。

自分たちもそうなりたい、という憧れ。そして願わくばそれは、卒業後も続くものであってほしいという憧れ。

惣輔は、俯く潮の頭を撫でてやった。

この愛すべき後輩に悲しい顔をさせてしまって申し訳ないという気持ちだった。そして同時に、やはり逃げられないこの「卒業」に際して、愛琉志とちゃんと話をしなければいけないという覚悟も芽生えてきた。

後輩に悲しい顔などさせられない、という想いと、どうかこの後輩たちも、自分たちと同じように、幸せな思い出がたくさん積もる高校生活を送ってほしいという願いと。

【一月　酸ヶ湯愛琉志と阿蘇空太の場合】

「朝はこれとこれね、で、お風呂ではこれ、夜は寝る前にこれとこれで…」

「はーっ、今月のお小遣い全部なくなっちゃった！ナルくんって毎月美容代にすごい額かけてるんだね」

「当然☆俺ちゃんの美しさ維持のためにはこれぐらい安いもんだからね☆」

ある休日の昼間、空太に、いつも使っている化粧品を教えてほしいと頼まれ、愛琉志は一緒に買い物に連れ立った。

可愛らしい顔をしながらも小生意気な後輩を、行きつけの店に連れていき、あれやこれやと見立ててやるのは楽しい行事だった。

「アッちゃんが俺ちゃんに化粧品を教えてくれなんて頼むなんて、随分と素直にかわいくなったもんだねえ」

黒玉寮の居間に買ったばかりの化粧品たちを広げ、愛琉志はにこにこと微笑みながらその後輩の顔を見守る。

言われた空太は、照れ隠しなのか、少し頬を赤らめて唇を尖らせた。

「まあ、ナルくんは入学してから今に至るまで、ラッくんに取られた一回きりを除いて毎月美男子コンテスト優勝してたし？ボクはそのままでもかわいいんだけど、少しぐらい見習おうかなって」

「おうおう、言うねぇ～」

こういった小競り合いのような会話をすることができるの

もあと何度だろうかと、ふと愛琉志は思う。
美しさを自認する愛琉志と、可愛さを自認する空太。似ているようで異なる二人。不思議な縁だと常々感じていた。

「…ま、俺ちゃんの卒業後はさ、アッちゃんが美男子コンテスト連覇目指してくれよ」
愛琉志は微笑みながら、小生意気な後輩の頭にぽんと手を乗せて撫でてやった。撫でられた側の空太は唇を尖らせながらも、満更でもないのかされるがままに髪の毛をわしゃわしゃと弄ばれている。
「…今更だけど、聞きたいことが、あって」
「ん？なんだい？」
「ソーくんとは、どういうきっかけで、そういう関係になったの？」
空太の目がまっすぐに愛琉志を見ていて、思わず愛琉志は手の動きを止めて固まった。
「…気付いてたの？」
「当たり前じゃん…気付いてないのなんて、鈍感なシンくんぐらいじゃない？」
呆れた顔を見せる空太と数秒見つめ合い、愛琉志は苦笑いをこぼした。
「…きっかけとか、もうそんなの覚えてないよ。気がついたらお互いに大切になってて、お互いにとって一番でありたいと思ってただけ」
嘘偽りのない本当のことだった。
いつの間にそうなっていたのか、本人たちにもわからない。寮で出会い、不思議と波長が噛み合って心地良く、穏やかな友情を築いていき、それはいつしか、自分の隣に常にいて欲しいという願望に変わっていった。
それは愛琉志だけのことではなく、お互いにそう思っていて、気がつけばそのことすらお互いに察していて、自然な流れで手を取り合っていた。

「そう、なんだ…」
空太は目を伏せてぽつりと呟いた。何か明確に一歩踏み出すきっかけがあったなら、それを真似しようと思っていたのだがそうもいかないようだった。

潮と踏み込んだ関係になりたいと想い出したのはいつからだったか。もちろん今もう既に、深い友情を築いている自覚はある。夏に実家に呼んだのも、自分のアイデンティティを知ってほしかったからだった。
潮はいつも事ある毎に、空太の欲しい言葉をくれる。褒めることも諌めることもしてくれる。それ以上に噛みついてく

ることもあるが、それすらもいつしかどこか優越感すら感じていた。
しかし、それまでだった。
愛琉志と惣輔のような、安定して互いを信頼しあっているかのようなものとはまだ少し違う気がする。
「アッちゃんの悩みを当ててあげようか。ウーちゃんでしょ」
そう言われて顔をあげると、保護者のような優しい微笑みで見守る先輩がいた。
「アッちゃん頑張ってアピールしてるのにね。ウーちゃんももう少し食欲から離れたらいいのにね」
「…ほんとだよ、ほんとにそうなんだよ」
図星に当てられて気恥ずかしさもあるが、それ以上に、こんな話をあけすけにできるのも案外愛琉志だけかもしれないと思い、空太は口を開く。
「こーんなにかわいいボクのこと、もっとちゃんと独り占めしようとしてくれたらいいのに」
出てきた不満の言葉の可愛らしさに、思わず愛琉志は吹き出した。独り占めしようとしてほしい、という願望は、愛琉志の目にはあまりにも可愛らしく映る。
そして同時に、それは、自分が惣輔へと抱く願望とも重なる。
「本当にね…ソーちゃんも、こんなに美しい俺ちゃんをもっと独占したいって思ってくれてもいいのにね」
愛琉志の口から、気を抜いたのかそんな本音がぽろりと溢れた。
それは、卒業が近づいた今、心のなかで懸念に思っていることとも重なる。
「ソーくんは博愛主義なところあるもんね」
「みんなのマミーだからね」
「…でも、卒業したらみんなのマミーじゃなくて、ナルくんだけのソーくん、になるんじゃないの？ボクらはちょっと寂しいけど…」
想像してさみしくなったのか、空太は頬杖をつきながらそう言い、愛琉志の顔を見守った。
「どうかな…」
空太の瞳に、苦笑いのような、淋しげな笑顔をした先輩の顔が映る。
卒業後のことは、なんとなく、お互いに話を避けている気配があった。黒玉寮を出た後はどうするのかだとか、卒業後はどうやって付き合いをしていくのだとか。

そもそも、卒業後にもこの付き合いは継続していけるのか、だとか。
きちんと向き合わなければならないとわかっているのに、まだもう少し続く日常で、こうして近い距離で過ごしている心地よさに現実逃避をしている。

【一月　雲仙新九郎と乳頭左門の場合】

「…モンさん、どういう風の吹き回しなんだ？」
新九郎はその日、珍しい人物に話しかけられて校舎裏に呼ばれた。呼び出した乳頭左門は、周囲に人がいないかと神妙にあたりを見渡し、誰もいないのを確認した後にふぅっとひとつ大きな息を吐いて新九郎へと向き直る。
「貴様を呼び出したのは他でもない、殿のことだ！」
「殿？あぁ…スーさんのことか！」
「卒業前に、某は知らなければならないのだ…まだ知らない殿のことを！」
左門はそう言い放つと天を仰いでひとつ大きく息を吸って、吐いた。
「某と殿が出会ったのも幼少期のことだった…幼少期から、殿は凛々しく強く賢く、それはそれは立派な方で…」
「なあ、その話長くなるのか？長くなるなら、立ち話じゃなくてゆっくりできる場所で話そうぜ！防衛部の部室とか！」
かくして、興に乗り出した左門の話は強制終了され、新九郎に半ば引っ張られるような形で防衛部部室へ連れ込まれる。

「…というわけで、殿がいかにして立派なお方なのかはわかったか！？」
ここ最近は部室で集まってダベることも少なくなっていたせいもあり、防衛部部室には誰もいなかった。新九郎と左門、同学年のクラスメイトでありながらもとりたてて積極的に交流を持ってはこなかった二人という、不思議な組み合わせでこの部屋にいる。
「うーん、すっげぇ長かったけど、スーさんがハイカラだってことはわかったぜ！」
左門の延々と話す話を、最初こそちゃんと聞こうとしていた新九郎だったが、途中幾度も脱線してしまうため、新九郎は途中からあくび混じりに聞いていた。
「某が言いたいのはそこだ！ハイカラなどという簡易な、なんでも使えるような言葉で殿を丸め込みおって…いや、殿が好んで使っているなら簡易な言葉ではなく、深い意味のある言葉なのか…？」

いつも通りハイカラの一言ですまそうとする新九郎に対し、左門は怒りを爆発させようとするも、途中から思考を転換し首を傾げる。

「まあなんにせよ…殿は、あれほどの外道な目に合わされながらも、貴様のことを気に入っているらしい」

「そりゃあまあ、俺とスーさんは昔からの仲だし、それに…」

そう言い放ちながら新九郎はふと、自身と珠闘麗斗との関係性について考えた。

特に何も疑問を持たず、昔からの仲良しで、確かに一時期は少し距離があったかもしれないが、和解した今となってはそんなこと些末なことである。

「…ハイカラな未来でも一緒だぜ！って、約束したし」

「そこだ！そこが問題なのだ！雲仙新九郎！」

大きな声を出し、バンッと机を叩く。

「殿と未来を約束するということは軽々しいものではないとわかっているか！？あのいつもつるんでいる輩たちとは違うのだぞ！」

「…え、…お、おう！」

左門の凄まじい気迫に押され、思わず新九郎は戸惑った。

左門はさきほどから何を言っているのだろう。言われずとも自分は珠闘麗斗をこの先もずっと追いかけていくつもりだし、共に歩む未来だって容易に想像が…

「あ、あれ…？」

ふと、新九郎は困惑した。

珠闘麗斗と共に歩む未来とは、具体的には何を指すのだろうか。

変わらぬ友情を紡ぐこと、これからも一緒に飯を食い風呂に入り寝ること。でも、それでは寮の仲間たちとも一緒である。それだけじゃ、なにか物足りない。

「…俺、スーさんとどうなりたいんだろう…」

「ふん！まったく、そういうことだろうと某にはわかっていた！まったく貴様というやつは某と違って情けない…仕方ないから教えてやろう。殿とハイカラな未来を一緒に、ということはつまり、殿を敬い、殿を愛し、それから…」

延々と語り続ける左門の声など、新九郎の耳には入ってこなかった。

なにかが物足りない、と思った瞬間、脳裏に浮かんだのはあの手縫いの人形だった。

手と手を繋いで赤い糸でぐるぐる巻きに結びながら、幼心ながら、何を考えていただろうか。

そして、時を経た今、自分はあの赤い糸にどんな願いを込めるだろうか。

【一月　百目鬼珠闘麗斗と猫魔祐の場合】

目の前に差し出された紅茶のカップを手に取り、珠闘麗斗はまずその薫りを味わった。そして優雅な手つきでカップに口をつけ、一口味わう。

その一連の流れを見届け、祐も同じように紅茶を一口飲んだ。

「こうやって祐と二人でゆっくり話す機会は案外なかったからな。今日は嬉しく思うぞ、祐」

「…いつもはうるさい副会長も一緒でしたしね」

昼下がりの静かな生徒会室で、珠闘麗斗と祐は連れ立って紅茶を飲んでいた。

誘ったのは珠闘麗斗の方だった。自身の卒業が近くなったこの頃、生徒会長としての業務の引き継ぎを行いながら、珠闘麗斗は左門と祐の様子をしっかり見ていた。

とある出来事以来、二人はすっかり打ち解けて良好な関係を紡いでいた。この二人に任せれば眉難高校の未来は安泰だろうと信頼はしている。だからこそ、一度それぞれとしっかりと話をする必要もあると思っていた。

「春からはいよいよ祐が副会長だな」

「ええ。百目鬼会長と違って、随分と頼りない人が次期生徒会長になりますからね。僕が今まで以上にしっかりしなければと思っていますよ」

口では毒舌めいたことを吐きながらも、当該人物に対して本心から嫌味を持っているようではないのは、祐の表情が柔らかく微笑んでいることから明らかだった。

「左門はああ見えて筋はしっかり通った男だ。頼りない面があることは事実ではあるが…まあ、祐がいれば大丈夫だろう。何も心配はしていない」

「やはり百目鬼会長はあの人に甘すぎますよ。今まで甘やかされていた分、僕がしっかりとお尻を叩いてやらねばですね」

そう言って二人は顔を見合わせ、ふふ、とどちらかともなく笑みを零した。

最近の左門と祐が、すっかり良好な関係を築いているのを、珠闘麗斗は微笑ましく見ていた。

毒舌めいたことを漏らしながらも祐は左門を見守っては楽しそうに世話をしてやっている。左門は左門で、最近の祐は随分と可愛げが見えてきた、と嬉しそうにしている。

まるで自分と新九郎のようだ、と感じるときがある。

和解をした後、珠闘麗斗と新九郎に対して作っていた壁を壊した。本当はもっと早くから素直になれば、そんな壁など不要だったのかもしれない。

距離を置いていた期間の穴を埋めるように、会話をし、共に時間を過ごした。相変わらず忘れっぽい新九郎に時には呆れることもあるが、やはり一緒にいれることを嬉しく思う。
これからまだまだ時間はたくさんある。未来も共にいると約束したのだから、焦ることなく、二人で共に歩んでいくといいのだ。そんな安心感がある。
左門と祐にも、自分たちのような関係を築いて欲しい。珠闘麗斗は素直にそう思っていた。

「…祐」
「はい、なんでしょう」
名前を呼ばれて顔をあげると、珠闘麗斗はいつになく優しい瞳でこちらをまっすぐ見ていた。
無論、昔からずっと、珠闘麗斗がそんな優しい瞳で自分や左門を見つめることは多々あった。
しかし、ある時から、その慈愛の瞳は以前にも増して穏やかさと優しさを増したように思える。
言うまでもない、雲仙新九郎と和解したときからだ。
「私は、いつも自分が正しいと思うことをして生きてきた。そのこと自体は、間違っていたとは思わない」
「…ええ」
「だが、正しさに囚われて見失うものもあるのは事実だ」
「……」
この敬愛すべき生徒會長は自分に何を言わんとしているのか。祐は静かに続きの言葉を待った。
「祐、正しさや規律にばかり囚われなくていい。ときには自分の心に素直になってみるのも大切なんだ。そのことはこれからも忘れずにいてほしい。…後悔しないためにも」
珠闘麗斗の瞳は相変わらず優しい色で猫魔祐を見つめている。
その瞳に魅入られて祐は動けずにいた。
同じ瞳の色で自分を見守ってくれる存在を、もう一人知っている。

———祐も一緒に、殿にお仕えしないか？

懐かしい声が、祐の脳裏に思い起こされた。

【二月　長万部潮と阿蘇空太の場合】

「今日はソーくんもナルくんもいないんだって。シンくんもカイチョーのところ行くって言ってたし、夕飯はボクら二人だけだって」

空太はそう言ってため息をつき、炊事場に立つ。
「そっかぁ…ん？ってことは、五人分の夕飯を二人で食べられる…？」
「んなわけないでしょ。そもそも二人分しか作らないよ！」
相変わらずの旺盛な食欲を見せる潮に、空太は呆れ顔で返事を返しながら、炊事場でてきぱきと準備を進めた。
普段は惣輔が着ていた割烹着を今日は空太が身につけている。長男ということもあり実家では時折料理もしていたので、空太自身も簡単な夕飯ぐらいは作れる。とはいえこの一年はずっと惣輔に甘えていたのだが。
惣輔たちの卒業後は、そうもいかない。
「…空太って、案外なんでもできるよな。裁縫だって得意だし」
潮が背後から手元を覗き込んできた。不意打ちの距離の近さに思わず空太はどきりとする。
「ボクにかかればこれぐらい、なんでもないの。ほらウッくん、ここにいたらつまみ食いするでしょ。すぐ作ってあげるから、あっちで待ってなよ」
「うーん、まあ…誘惑にはかられてしまうけど…」
調理途中のものであろうが、手つかずの食材であろうが、食欲のままに手を伸ばしてしまうのが潮だった。それを懸念して居間で待つように言うが、潮は何やら思案しているようで動く気配がない。
調理を進める空太の傍から離れようとしない。
いや、離れたくない、が正しい。

この一年、空太への気持ちが抑えがたいものになっていったのを自覚している。
食べたいだとか食欲めいたものだとか、そういった類とはまた違う。衣食住を共に過ごしていろんなことを知っていったつもりでいた。でもまだ知らない一面がある気がしていて、それを知りたい。
そしてそれを知った上で、どうなりたいのか。
一番近くありたい。
特別な関係に、なりたい。

先日惣輔と話をしたときのことを思い出す。惣輔と愛琉志は、卒業後は当然のように一緒にいて、あのような関係を繋続けるものだと思っていたが、意外にも卒業後の未来は決まっていないのだと言っていた。
同室だから。一緒に過ごす時間が長かったから。それが当たり前になって、卒業後のことが逆に想像できなくて。
そんなことを惣輔は言っていた。

あれから二人は話し合ったのだろうか。
三年かけて絆を作り上げてきた二人ですらああなのだから、自分たちは、のんびりしてはいられないのではないだろうか。
…それ以前に、自分は空太の隣にいて、一歩踏み込んだ関係を望んでもいいのだろうか、あるいは、なれるだろうか。

潮がそんなことを思案しながらなんとなく空太のそばを離れずにいる中、空太はわざと気付かないふりをして調理を進めていった。
最近なんとなく潮の様子がおかしいのは察していた。
いや、潮だけではなかった。黒玉寮そのものが、そわそわとしている。三年生が卒業するから、いろいろなことが起こったこの一年がもうすぐ終わろうとしているから。
自分たちの想いが、転換期を迎えようとしているから。
魚を火にかけながら空太は思案する。

『関係って、なんとなく曖昧なままでいちゃだめなんだなって、今更になって思うんだよね』
珍しく自信なさげな瞳をして愛琉志は言っていた。
『アッちゃんもさ、ウーちゃんなんて特にあんな感じなんだから、進展したいなら、はっきりと迫ってみてもいいんじゃないかな』
『俺ちゃんたちは、あまりにも距離の近さが当たり前になりすぎちゃったよね。もちろんお互いちゃんと好きなのはわかっているんだけど』

先輩からの忠告、と言って額をつんと突いてきた愛琉志を思い出した。
細かなことや踏み込んだことは聞けなかった。それは聞かないという線引は空太にはある。
この卒業という時期は、潮とのことをはっきりさせる良い機会なのかもしれないと空太は思った。

「…熱っ」
ぼんやりと考え事をしていたせいか、ふいに、火元に指を近付けてしまった。反射的に飛び退いたおかげで指先がほんの少し痛むだけですんだのだが。
「空太！？大丈夫か！？」
そばにいた潮は慌てて空太の腕を掴んだ。そのまま強制的に、蛇口から流れる水で指を冷やされる。
掴まれたその力は強く、腰ごと抱き寄せられるような形で体を固められている。ちらりと見た潮の横顔は、本当に心配そうな慌てた表情をしていた。

「痛まない？大丈夫か？」
「ぜーんぜん平気。ウッくんてば慌てすぎだよー」
本心から心配している様子の潮に、思わず心が弾んでしまう。近づかれるのも噛みつかれるのも慣れっこだが、こういうとき、潮は男らしさを発揮し真摯に心配してくれる。それが嬉しい。
嬉しいと同時に、でも、潮は優しいから他の人間でも同じようにするのだろうな、とも思ってしまう。
今は黒玉寮では自分たちが最年少で、潮も先輩たちから可愛がられることの方が多い立場だ。だからそれほど気にしていなかった。
でも来春、後輩ができたら。潮はこの優しさを、今度は後輩に向けてやるのだろうか。

「ウッくん」
「なに？どうした、空太」
「ウッくんはさ、いつも優しいよね」
「…別に、これぐらいは、普通だろ…」
不意打ちに褒められたせいか、潮の頬が少し赤くなる。
「そうだよね、ウッくんには、普通なんだよね…」
カワイイボクだけ可愛がってよ、と抗いたくなる気持ちを止められない。自分だって、潮に心惹かれたのは、己が無個性だと自己肯定感が低い割に、誰かのためなら心から頑張れる優しさを持ち合わせているからでもある。
自分に向けられる捕食癖だって、ぎゃーぎゃー言って抵抗はするが、内心少し優越感を感じているのも事実だ。
だからこそ、この立場を捨てたくないという気持ちが芽生えている。

流れる水道の水で冷やされ、火傷の痛みなどもうとうに消えている。それでもなお腕を離さない潮が愛おしい。
「ねぇウッくん」
「どうした、あく…」
名前を呼びきられる前に体の向きを変えて抱きついた。少し首を傾け背を伸ばし、唇に食らいつくように重ね合わせる。
瞳は閉じているので目の前の潮がどんな表情をしているのかわからない。ただわかるのは、いつも噛みつかれるその感触が、こうして同じ箇所を重ね合わせることでより一層やわらかく感じるだけ。

【二月　酸ヶ湯愛琉志と卯花惣輔の場合】

西日が差し込む部屋で、愛琉志は一枚の名刺を手にしてぼんやり思案していた。

県内に住む写真家から専属モデルにならないかと声をかけられていた。実はそれ以外でも、芸能事務所やモデル事務所からも声をかけられているところはある。しかしいずれも所属するためには県内を出なければいない。それが愛琉志を迷わせていた。

地元愛がそれなりにあるから、というのだけが理由ではない。惣輔が県内の学校に進学するのを知っているからである。

この写真家の話に乗っかれば、地元からは出ずにすむ。しかし同時に、それはもっと大きく有名になることとは疎遠になることを示す。

地元を離れて全国レベルで美しさを極めて…とまでは考えていない。今手元にあるもの、身の回りにあるものに美しさを見出し、それを愛でてより自分も美しく輝けるのならそれでいい、と思っていた。

そしてその中には惣輔も含まれる。

卒業後どうするのかの話はお互いなんとなく避けている。もともとを言えば、お互いにそれなりに好意は認識しあっていても、実は明確に恋人関係に…などと契ったわけではない。

お互いに特別な存在である自覚はある。相手に抱く想いは、唯一無二のものだとはわかっている。だからこうやって三年間、衣食住を共にしても苦にならないし、皮肉にも、だからこそ、わざわざ互いの関係に「恋人」という形をはめる必要性が見つからなかった。

高校を卒業したからといって縁が切れることはないだろうが、卒業して生活を共にしなくなったら、自然と距離感は離れてしまうだろう。

かといって、今更、自分たちの関係について問いただしたり、どうするつもりなのかも問えない。問う勇気がない。

最初からはっきりさせておけばよかった。

愛琉志は、先日、空太へ与えた助言を思い出し、我が身を振り返った。

空太はあれから潮と関係を進めることができたのだろうか。

「…ただいま」

心苦しい思いでいるとちょうど惣輔が帰ってきた。

「…おかえりソーちゃん！遅かったね」
「ちょっと、いろいろと用事があってな」
そう言いながら椅子に腰を下ろし鞄から何やら書類の束を取り出し、机に置いた。
愛琉志は一連の所作を目で置いながら、机に置かれたその書類を見てはっと息を呑んだ。
「…不動産屋さん、行ってたんだ」
「ん？ああ…物件探しをせねばと」
「実家から通うわけじゃないんだね、学校」
自分の知らないところで惣輔の卒業後の生活の準備がされている。そのことに胸が苦しくなった。
新しく住む家になるそこには自分は気配すらもいないのかもしれないと思うと、拗ねて部屋から飛び出してしまいたくなる衝動にかられる。

「なあ、愛琉志」
「なあに、ソーちゃん」
心に沸いた黒い気持ちを喉元で抑えながら、愛琉志はなるべく明るい声で返事をするように務めた。しかし、どうしても声音に少し震えが入ってしまう。
「ずっと…言わなければと思っていたことがあるんだ」

窓から差し込む西日に照らされたまま、惣輔がこちらを向く。少し眉根を下げて、緊張しているような面持ちで。
愛琉志の胸がどきりと鳴った。嫌な想像が頭を駆け巡る。不動産屋の資料。最近お互いなんとなくぎくしゃくしていたこと。迫る「卒業」という区切り。

「…今までありがとう、なんて言葉はやめてよね」
「え？」
自分の口から出た声音が思っていた以上に低かったことに愛琉志自身がうろたえた。
惣輔の顔を見るのが怖くなり、顔を背ける。
「卒業したら終わりとか、そんなの認めないから」
「なにを言っているんだ…」
予想外の回答に、惣輔の方も思わず動揺して声がかすかに震える。
最近、愛琉志の様子がおかしいとはわかっていた。それは、進路がまだ定まっていない不安なのか、他に懸念事項があるのか、読み切れていなかったが、ただそばで見守るしかできなかった。
もしや、なにか勘違いをさせていたのだろうか。あるいは。

惣輔は立ち上がって愛琉志の方へ近づいた。肩を掴み、ぽんと軽く叩いてやると、愛琉志は不安げな表情を変えないままこちらに顔を向けた。

「愛琉志…その、もし、お前さえよければ…」

「……」

「卒業後も、…一緒に、住まないか…？」

「……え？」

【二月　乳頭左門と猫魔祐の場合】

「殿はやはり偉大なお方だ…某は勉学と鍛錬をこなしながら、會長業務をこなすなどできそうにもない…」

生徒會室で引き継ぎ業務の資料を見ながら左門はうめき声をあげた。座っていた椅子の背もたれに大きく沿ってもたれかかり、ため息をつく。

「しっかりしてくださいよ、あなたが…」

隣で同じく資料に目を通していた祐は、いつものように諭す言葉を紡ぎかけ、ふと口をつぐんだ。

背もたれに沿ってさらりと溢れる左門の髪が美しい。困ったように垂れた眉も、への字に曲がった口も、以前なら苛立っていたかもしれないが、今となっては愛しさすら覚える。

「……僕が支えますから、大丈夫ですよ」

思案した末に出た言葉が、自分では思っていないほど甘い声音だったことに祐自身が驚いた。

恥ずかしくなり、慌ててごまかすように書類の束をとんとんと机につけて整える。

「…祐、最近なんだか本当に……その…」

左門は瞳を見開いて後輩を見つめた。

最近の祐はこういうことが多かった。邪険な態度は随分と減り、自分に対して慕うような素振りすら見せる。

嬉しくなり左門の頬が緩む。

左門は左門なりに不安を抱いていた。今までは珠闘麗斗を支える立場として全身全霊を捧げてきた。それが天命とすら思っていた。

しかし卒業後は自分が学校を引っ張る側となる。はたしてその責務が自分に務まるのかと不安だった。しかしだからこそ、祐がこのように優しくなったことが嬉しい。

祐の頬が心なしか赤くなっているのは窓から差し込む太陽の光のせいだろうかと左門は考えた。

その少し染まった頬をなんだか愛おしく、感じ、自然と左門の手はそこに伸びる。

「えっ……！？ちょ、何するんですか……！？」
「ん？ああ、すまん！　随分とかわいらしいなと思ってな！」
　頬を少し撫でてやり、その手を今度は頭に乗せる。幼子を撫でるような慈愛の気持ちで、そのつややかな髪を撫でてやると、祐の頬がますます赤く染まっていった。
「……子供扱い、ですか…」
「まさか！某にとって祐は、大事な相棒だ。対等な」
　左門はにこにこと微笑みながら言葉を続ける。
「そうだ祐。春からは我々はより一層しっかり手を組んで協力していかねばならないからな！そのためにも、今から二人で町にでも行かないか」
「え…？」
「俗に言うデートというやつか？某たちの絆をより強固なものにするためにも、だ！」
　相変わらず頭を撫でながらにこにことそんなことを言ってくる左門から、祐は目を離せなかった。

　いつからだろう。この少し馬鹿な男の笑顔から目が離せなくなったのは。
　いつからだろう。無邪気な声で名前を呼ばれるたびに、胸に暖かなものが広がるようになったのは。

　どうして自分は、今こんなにも嬉しくて、胸が高鳴っているのだろう。
――自分の心に素直になってみるんだ、祐
　敬愛する誰かの声が聞こえた気がした。
　あなたは、素直になれなかったことを後悔したんですか。
　だから僕にそんなことを言ったのですか。

　頭の上に置かれた手を掴んで押し戻した。驚いた顔をする左門に向かって微笑む。

「何を言ってるんですか。今日はやるべきことがあるでしょう。…そのかわり、明日なら、構いませんよ」
「…！」
「明日…デート、しましょうか。ちょうど行きたかった喫茶店があるのです。付き合ってもらいますよ、いいですね？」
「…ああ！もちろんだ！」
　左門は一層嬉しそうな満面の笑みを浮かべ、よしっ、と一言、自身に鼓舞するように声を出し、再び目の前の書類に向き直った。
　さきほどの緩んだ笑顔とは打って変わり、きりりと眉根を

寄せ、見た目だけは賢そうに見える。

その変化を見守りながら、祐は、今夜はわくわくして眠れないかもしれないという予感がしていた。

【二月　雲仙新九郎と百目鬼珠闘麗斗の場合】

包み紙を開いたら色とりどりの金平糖があった。それを一粒手に取って口に運ぶ。口の中に広がる砂糖の甘い香りが、心を暖かくしてくれる。

新九郎の方に視線を向けると、新九郎も金平糖を口に含み、舌の上でころころと転がしている様子が見て取れた。見られているのに気付くと、ニカッと笑顔を向けてくる。

「やっぱり駄菓子屋は楽しいな、スーさん！」

束の間の休日、珠闘麗斗は新九郎と二人で連れ立って町へと出た。誘ったのは珠闘麗斗の方だった。

思い出の駄菓子屋は店主が代替わりしていた。思い思いのままに好きな駄菓子を買い、店の軒先に用意された飲食用の場所で広げる。

「スーさんは卒業したら実家から大学に通うんだよな～。大学ってどのあたりなんだ？ここからどのぐらい時間かかるかな？」

「何を言っているんだ。大学は勉学を嗜むところであって、遊びに来るところではないんだぞ」

新九郎はかつてと変わらない感覚で大学にまで遊びに来るつもりのようだった。苦笑いで返事を返しながらも、珠闘麗斗は内心嬉しく思う。

「卒業かぁ…卒業といえばさ、最近みんな、なんとなく空気が違うんだよなぁ。やっぱり、ナルさんやソーさんの卒業が間近に迫ってるからかなぁ」

珍しく困ったような表情を浮かべながら、新九郎は口の中で転がしていた金平糖を噛み砕く。

「卒業したからって縁が切れるわけじゃないし、未来はハイカラな、のに…」

噛み砕いた金平糖のかけらが口の奥に入り込んだ。舌でそこを探りながら、ふと、先日左門に呼び出された日のことを思い出す。

自分と珠闘麗斗が共に歩む未来とは、一体。

「皆が皆、お前のようなハイカラ思考ではないということだ。…それぞれ、思うところがあるんだろう。」

そう言いながら珠闘麗斗は、ふと、自分たちはどうだろう

か…と考えた。
自分と新九郎との関係について、今は驚くほど心穏やかに受け止めることができている。卒業したとてこの関係は変わらないと、信じられる。
しかし、冷静に考えてみれば、今はこうして良い関係を紡いでいるが、この関係性はどのように表せばいいのだろうか。
親友？相棒？兄弟のようなもの？
どの言葉にも自分自身がしっくり来なかった。というより、本心ではもっと望んでいる何かがあるような気がした。
この気持ちは。

「スーさんはさ、俺のこと…」
不意に新九郎が口を開いた。珍しくどこか神妙な顔をしてこちらを見ている。
どうした？と珠闘麗斗が問いかける前に、新九郎の手が珠闘麗斗の手に重なった。
思わずドキリとしてしまい、その手を振りほどくことも何もできず固まる珠闘麗斗だったが、それは新九郎も同じだった。
不意に伸ばしてしまって手を重ねた。珠闘麗斗の本音を知りたくなって。

「…俺のこと、好き？」
「…は？…な、何を、突然…」
唐突に問いかけられた質問に珠闘麗斗は思わず顔を真っ赤にした。

【二月　長万部潮と乳頭左門の場合】

「みたらし団子、十本ください。ここで食べます」
「はいはい、十本、ここでね…じゅ、十本！？」
団子屋の店主は平凡な見た目をした少年の注文数に目玉を向きそうになった。
山盛りに盛られた皿を隣に置き、1つ目の串を口に運ぶ。甘い黒蜜の香りが口いっぱいに広がるが、今の潮にはそれほど甘くは感じない。
もっと甘いものを知ってしまったからだった。

空太の唇は甘くて柔らかかった。
不意打ちだったので瞳を閉じることもできなかった。空太に抱きつかれて身動きもとれず、それでいて、唇は重ねられてそこの柔らかさだけが思考を占める。
しばらく経ってようやく唇が離れると、空太はしばし呆け

た顔をしたが、はっと気付いた途端、頬を染め、唇を尖らせた。
「…ばかまんべ！」
「…えぇ？」
突然接吻された上に馬鹿と罵られ、潮には何がなんだかわからなかった。その日は夕食時には目を合わせてくれず、夜、布団に入る前にようやっと少し話ができる空気になった。
「なぁ、空太…その、今日の、接吻って……」
背を向けて寝ようとする空太に恐る恐る話しかけると、少し頭を傾けてこちらを見てくる。
その顔は、頬がまたうっすら赤く染まっており、眉は不機嫌そうなまま。
「ごめん空太…その、自分、こういうの、どうすればいいのかわからなくて」
「こういうの、って何……普段からしょっちゅうボクのこと食べようとするくせに」
「そ、それは、空太がおいしそうで…いや、違うな、そうじゃなくて…」
おいしそうで、と言うとあからさまに空太がさらにむくれたので慌てて言葉を取り繕った。
どうしたものか、と頭を掻く。
「ウッくんの言う、おいしそうって、何…」
再び背を向けてしまった空太から、少し弱々しい声が聞こえてきた。
「ボク的には、一生懸命がんばったつもりなんだけど…伝わらない？」
「…え？」
潮の心臓の鼓動が早くなった。
鈍感な方なのだろうという自覚はある。しかし、今の空太を見ていると、もしかしてそういうことだろうか、という淡い期待が沸いてくる。
あの接吻は、空太からの、いわば、愛の告白だったのでは と。
「どうしようかな…」
数本目のみたらし団子を手に持ってぽつりと呟いた。結局あの日は決定打になることを聞けずに終わってしまった。
もしかしてという淡い期待と、まさかそんな、平凡な自分なんかが、という気持ち。そのふたつでせめぎ合っている。
――ああ、こういうとき、誰か相談に乗ってくれそうな人がいたらなぁ

「はぁ…困ったものだ。こういうとき某は誰に相談すればいいのだ…殿……」
「…え？」
潮の心を代弁するかのような言葉を放った人物もこちらに気付いたようで、互いに目があった。

「…で、祐が、『あなたはどこまで鈍感なんですか』『僕がここまでしたのに』と怒って口をきいてくれないのだ」
「…は、はぁ…」
悩み事を抱えながら宛もなく町を歩いていた左門は、偶然通りがかった団子屋で、見知った顔を見つけ、これ幸いとばかりに悩み事を吐露した。
左門の語る悩みはこうだった。
祐と二人で仲良くデートをした。行きたいという喫茶店に行き、町中を歩き回り、思い出話に花を咲かせ楽しい時間を過ごした。夕暮れ時、ふと昔のように手を繋いでみようと思い繋いだところ、祐の様子が変わりそわそわとしだした。どうしたのだろうと思っていたら、人気のない道のあたりで不意に祐が見つめてきた。なにか某の顔についているのかと問うと、祐が拗ねだした…とのことだった。

「貴様は祐と同じ年齢だろう。だから何かこう、その年頃の人間としてわかることがあるのではないか？」
「年頃って…ひとつしか変わりませんけど…。あ、あと、団子あげるのは一本だけですよ！あとは全部自分のですからね！」
好きなだけ自身の話をしておきながらもぐもぐと団子を口に運ぶ左門を見て、思わず潮は残りの団子の生存戦略について思考を巡らす。
それにしても。

今聞いた話は、どことなく自身と空太の話と似ている気がした。なんなら、猫魔祐と空太も何かしら似ている面があるように思えるので、同じかもしれないとすら思い始めている。
おそらく。
「あのぉ…その、それってたぶんなんですけど、ちゃんと告白しろって言いたかったんじゃないですか…？」
「…告白？」
恐る恐る切り出した潮に対し、左門はまだいまいちピンと来ていないのか、口の端にみたらし団子の黒蜜をつけたままきょとんとする。
「えーっと…なんていうか、話を聞いてる感じ、結構、猫魔

から、乳頭先輩に対する好意を感じるというか…。おまけに、一緒に出かけて手まで繋がれるなんて、両思いなのかなって期待するじゃないですか」

話しながら潮の脳裏に、あの日の接吻が蘇る。

「なのに乳頭先輩が告白も何もしてこないから、しびれを切らした、とかじゃないですか…？そういうのって、やっぱり年上から来て欲しいものな気もするし」

「…なんと……」

左門の中で点と点が結びつき、神の啓示が降りたように胸の内の情熱が弾け上がる。

祐のことは、かわいらしい同朋だと思っている。優秀な頭脳も認めているし、何より、誰よりも努力を惜しまない人間であることは自身がよく知っている。

最近随分と素直になりかわいらしい態度を取るようになったこと。デートしたあの日も、なんだか終始嬉しそうだったこと。あなたは僕が支えますよと言う優しい声音。

それら全てが、今は愛しくてたまらなく思っている。

この愛しいと思う気持ちは、言うまでもない、愛だ。

もちろん愛というのなら、殿にだって抱いている。しかし、殿に対するものとは少し種類が異なるようにも思える。

だとしたら、祐も同じように某に「愛」を抱き、愛して欲しいと望んでいたのだとしたら。

鈍感な某が、それに気付いていなかっただけなのだとしたら。

「…こうしてはいられん！某は今すぐ祐のもとに行かねば！」

左門は勢いよく立ち上がった。その反動で団子の乗った皿が弾み、潮は慌てて手で抑える。

「長万部潮！感謝する！某はなんと愚かだったことか…今すぐ、愛を伝えに行かねば！」

左門はそう言い、潮に深々と頭を下げると脱兎のごとく駆け出していった。

あっという間に遠ざかっていく左門の後ろ姿を見送り、潮は改めて新しい団子に手を伸ばしかけ――止めた。

「自分も…食ってる場合じゃない、よな…」

そういうことであるのなら。

自分も、空太のところに行かねば。今すぐに。

【二月　阿蘇空太と猫魔祐の場合】

寒い日が続いていた。教師に頼まれ事をして職員室に書類を届けた空太は、帰り際、人気のない中庭の外椅子に座ってぼんやりとしている猫魔祐を見かけた。

普段なら特に気にせず知らぬふりをしていたかもしれないが、なんとなく気になり、近寄る。

「…たすくん」

「…あ」

こちらを見上げてきた祐は珍しく覇気のない顔をしていた。声をかけても特に嫌な顔をする様子もなく、いつもの嫌味も飛び出してきそうになかったので、そのまま隣に腰掛ける。

「どうしたのさ、珍しく大人しいじゃん」

「うるさい、僕は基本的にはこうだ。隣にうるさいのがいるから紛れてしまうだけで」

口では反抗的なことを言いつつもその言葉にもやはり覇気はなかった。

といいつつ、空太も心のうちにもやもやとしたものを抱えていたので人のことは言えないのだが。

「…フクカイチョーのこと？そういえば今日は一緒じゃないんだ、珍しい」

「そういうお前こそ、いつもの大食いの相方はいないのか」

「…ウーくん？どこにいったんだろうね」

互いにいつも隣にいる人物がいないのをなじり合う。なじりあったからこそ、互いの心の内の傷に不意に触れてしまう結果になり、ふと黙り込む。

冬の風が静かに吹く。

二人は黙ったまま、ただ静かに座っていた。

勇気を出して潮に接吻をしたのに、潮からはまだ返事をもらっていない。そのことが空太の心を穏やかではないものにしていた。

カワイイボクがここまでしたのに、意気地なし。

そう言って罵ってやりたいのに、それをしたところで潮が困った顔をして己を責めるだろうことが想像できてしまい、そうではないのに、と気が引ける。

ただ不器用でもいいから、捕食ではなく、優しい接吻が欲しいのだ。

潮は時にとても漢らしいきっぱりした様を見せるときがある。空太が悩んだとき寄り添って背中を押す一言をくれるだとか。自信をつけさせてくれるだとか。

あのときも、思い切ってその男らしさを見せてほしかったのだ。自分が勇気を出したのだから。

抱きしめ返して、自分は空太が好きだと、言って欲しかった。

それとも、これは自分の自意識過剰で、潮は本当に自分のことを捕食対象としか思っていないのだろうか。

「…たすくんてさ、結構、まわりをよく見るタイプだよね」

冬空を見上げながらぽつりと空太は呟いた。

「藪から棒になんだ…」

「いーや、ボクもさ、結構そういうタイプだと自負はしてるんだけど…だからさ、だからこそさ、優しいけど鈍感な人に、つい、乱暴に当たってしまうことがあってさ」

「……」

「気付いて欲しかっただけなんだけどな。気付いてほしくて、心のまま素直に、ボクを見てほしかっただけなんだけど…ボクももっと素直になれればよかったんだよねぇ…わかってるんだけど…」

独り言のように言葉を連ねる空太の横顔を、祐はちらりと盗み見た。

空太が連ねる言葉は、まさに自分にも当てはまることがあるように感じた。

二人でデートをできて嬉しかったのだ。

町は賑わっていた。なにか行事ごとでもあったのか、人々が賑わい、思うままに余暇を楽しんでいた。

軒先に並ぶもののひとつひとつに目を輝かせる左門と歩くのは案外楽しかった。装飾品を一つ選んでは、これは祐に似合う、だとか、殿にぴったりだ、だとか喜ぶ姿に、思わず、「あなたにだって似合うと思いますよ」と本音を漏らし、本当かと言うと、喜んで肩を抱かれた。

その手の大きさに、見上げる大きな体躯に、羨望とも独占欲とも言える気持ちを抱いた。

夕暮れが近づき、そろそろ帰路かと思われたとき、不意に手を繋がれた。

手から繋がる温もり。その手越しに心臓の鼓動が伝わってしまわないか気が気でなかった。

期待をしてもいいのだろうか。

下心の沸いた祐は、それとなく人気のないあたりに誘導して連れて行った。

二人きりの場所。差し込む夕日。

自分から言い出す勇気はなかった。かつて自分の手を取って道を示してくれたように、また左門から言って欲しい。

「僕も……僕が素直になってしまえばよかったんだろうな」
「え？」
ぽつりと祐が呟いたのを、空太は驚いた顔をして見る。
「…生徒會室に行くから」
心でなにかを決心したのか、拳をぎゅっと握りしめて祐は立ち上がった。
「…うん、わかった」

仲睦まじい二人というわけでもない。ただなんとなく、たまたま、同じような悩みを抱えた同窓生がたまたま居合わせただけの、僅かな時間。
しかし、不思議と、これからこんな風に、なんとなく互いの心の内を見せ合う機会も増えるのかもしれないと、二人は思っていた。

【二月　酸ヶ湯愛琉志と雲仙新九郎の場合】

写真館の主人と打ち合わせを済ませ、愛琉志は黒玉寮に帰ろうとしていた。寮へと向かう長い階段、それをとんとんと降りていく足取りは、少し前と比べると軽快に見える。

「卒業後も、…一緒に、住まないか…？」
少しためらいのあるような、遠慮がちな声音で惣輔が言ったのを思い出す。
思い出して、胸が暖かくなる。

卒業後どうするのかを惣輔からは切り出さなかったのは、愛琉志の進路が県内なのか県外に出るのか定まってなかったからだと言っていた。
惣輔は県内で進学するため、県外となるなら必然的に二人の距離は遠くなる。しかし、だからといって我儘を言って愛琉志の可能性を狭めたくない。だから下手に聞けず、なんとなく距離ができていた。

「定まってから切り出そうと思っていたんだが…あまり悠長にもしていられなくてな……」
「そんなの…ソーちゃんこそ先に言ってくれたらよかったのに…俺ちゃんの美しさを活かす道なんて、県内でも県外でもどこでだって実現可能なんだよ…だったら、俺ちゃんは、卒業後もソーちゃんといたいよ」
愛琉志は思わず惣輔の両手を掴んでぎゅっと握った。
二人の視線が噛み合い、自然と微笑み合う。互いのことを慈しむような優しい瞳。今まで幾度もそうして互いに見つめ

合い、きっとこれからも続くであろうもの。

回想をしながら階段を途中まで降り、そこで上を見上げる。

三年間一緒に登り降りしたこの道も、卒業したら滅多には来なくなるだろう。けれども、場所は変われど、惣輔の優しい瞳は、これからも隣にあってくれる。

それならば、自分は卒業後も、自信をもって美しくいられる。

「ナルさん！いま、帰りか！？」

階下から聞き馴染みのある元気な声が響いて、そちらを振り向いた。見れば新九郎が笑顔で手を振っている。

「ただいまシンちゃん。シンちゃんこそ、どこ行ってたのさ」

入学して以来、初めてできた後輩。自分たち二人にとってはかわいい弟のような存在だったなと、改めて新九郎を見た。昔から変わらず元気にハイカラハイカラと言っていた彼だが、珠闘麗斗と和解して以降は少し周囲をちゃんと見るようになるなど、成長の兆しも見せている。

それがとても嬉しい。

「俺はさっきまでスーさんと一緒にいたんだけど、スーさん、入学準備で忙しいからって帰されちまってなー。あーあ。大学生になるって結構忙しいんだな」

口では明るい声で振る舞っているが、表情は少し寂しそうだった。

珠闘麗斗は実家から大学へ通うと聞いている。新九郎とは互いの実家が近く、また、そもそもこの黒玉寮からもそれほどは遠い場所ではない。会おうと思えばそれほど困難なく二人は会えるだろう。とはいえ、高校生と大学生、生活リズムも時間の過ごし方も異なるだろう。

さすがの新九郎も、少し寂しさを感じているのかもしれない、と愛琉志は思った。

「シンちゃん、せっかくだから、居間でお茶でも飲もうか」

先輩心がくすぐられ、愛琉志はそう新九郎を誘った。

「せっかくスーさんとまた仲良くなったのに、一緒の高校に通えるのも残り少ないんだから、寂しいよなぁ」

出された湯呑みを両手で抱えながら新九郎はそう言った。

そう思うのも無理はないだろうな、と思う。

入学当初から、新九郎の方から積極的に珠闘麗斗に歩み寄る姿は幾度も見てきた。その度に珠闘麗斗は突き放していた…が、内心では珠闘麗斗も新九郎のことが気になってしょうがなく、本当は応じたいのに何かが引っかかって素直になれ

ないのが明らかに見て取れた。
　ようやっと和解をして楽しく高校生活を共に過ごせると思ったら卒業がもう近い。もちろん今後も会えなくなるわけではないものの、さみしく思うのは当然だろうと思う。
「スーちゃんだって同じ気持ちだと思うからさ。今まで通り、なるべくスーちゃんに会いに行ってあげな」
「おう、もちろんだぜ！もうスーさんが通う大学の場所もしっかり覚えてるしな！」
「ははは、大学内に乱入するのは怒られちゃうかもだけどね」
　新九郎らしい積極さが見え、心配など杞憂だったのかもしれないと愛琉志は微笑んだ。
「ナルさんやソーさんってさ、俺や潮や空太にとっては、先輩でもあり保護者って感じもあったよな！」
「そりゃあね、年長者は美しく後輩を引っ張るのが役目だからね」
　初めて新九郎が黒玉寮に入寮したときのことを思い出す。愛琉志も惣輔も、当時の先輩にいろいろと教えてもらい随分と助けてもらった。だから次は自分たちも同じように後輩を支えていこう、と二人で決めた。
　それから、なぜか生徒會が急に寮を改築して二階に住みだしたり、さらに下の後輩たちも増えたりと、振り返れば黒玉寮での歴史にもいろいろなことがあった。
「そんな保護者なナルさんやソーさんがいなくなっちまうのも、やっぱり寂しいなぁ。まあ、ハイカラな縁はこれからもずっと続くから、何も恐れることはないんだけどな！」
　新九郎はそう言って湯呑みのお茶をぐっと飲み干す。そしてふと、空になった湯呑みの底を見つめた。
「…なぁ、ナルさん」
「ん？」
「…俺、ナルさんもソーさんも、潮も空太も、ラクさんもヌルさんも、みんな、大事なんだ」
「うん」
「でもさ、その中でも特に、スーさんは特別に感じるんだ」
「……うん」
　いつになく真面目なトーンで話す後輩に、思わず愛琉志は姿勢を正した。
　二人の痴話喧嘩に巻き込まれてあやうく大変な目にあったのは昨年のクリスマスのことだ。
　あれから和解した二人だが、これからどうなっていくのかは少し気になっていたところでもある。
「で、スーさんは逆にどうなんだろうって思って、聞いたんだ。俺のこと、好き？って」
「うんうん…うん！？すごく直球に聞いたね…」

湯呑みの底を見つめながら言葉を綴る新九郎に対し、愛琉志は驚いて目を見開く。
「そしたらスーさん真っ赤になって、どうして貴様はいつもそんなに軽いんだ！とかって怒り出して」
「あー……スーちゃんも難儀な性格してるねえ」
情景があまりにもやすやすと想像でき、愛琉志は思わず苦笑いをした。
「なぁ、俺またなんかやらかしちまったのかなぁ。どう思う？ナルさん」
「うーん、そうだねえ…」
困った顔をしてこちらを見てくる新九郎を見て、愛琉志は先輩としてどういうアドバイスをすべきか悩んだ。
珠闘麗斗の方も新九郎に対して並々ならぬ想いを持っているのは言うまでもなくわかる。
ただ、流れ的にそのようにあっさり切り出されてしまったのが珠闘麗斗的には解せなかったのだろうと。
「シンちゃんの、その、ハイカラな勢いに乗って動いちゃうところは良いところでもあるんだけど。スーちゃんにとってはもう少ししっかりした場面で言ってほしかったんじゃない？」
言葉を選びながら、ゆっくりしっかり、愛琉志は言う。
「…しっかりした場面…？」
「スーちゃんが大切だし特別なんだよね？ていうか、好きなんだよね？」
「そりゃあ、もちろん！」
「じゃあさ、卒業式なんて、ちょうどいいタイミングなんじゃない？」
「…卒業式？」
「そ。卒業式のあとで大事な話がしたいから二人で会いたいって、スーちゃんに言っときな。そんで、それまでにシンちゃんもシンちゃんで、スーちゃんへの想いをちゃんと整理しときな」
新九郎を諭す愛琉志の瞳は優しい色味を帯びていた。
見守ってきた後輩。いつも仲間たちを引っ張り、ときにはちょっと暴走したり鈍感だったりもするが、それでも太陽のように周囲を照らす存在。
自分たちの知らないところであの生徒會長と紡いできた歴史があり、本来なら糸を織るようにずっと繋がれていたはずだったものがこじれてしまい、それが今改めて織られようとしている。
このチャンスを、逃してほしくない。
「スーさんへの、想い…？」
「そ。だってさっきシンちゃん自身が言ったでしょ。俺ちゃんたちへの想いとはちょっと違うって。それってどう違う

の？」
「どう、かぁ……」
新九郎は腕を組んで思案する。
「なんだろう…ハイカラを教えてくれたのはスーさんだし、スーさんと話すと楽しいし嬉しい…。あと、スーさんを一番応援するのは、俺でありたいっていか…」
いつになく真面目な顔で考えながら、そうつらつらと言葉を紡ぐ新九郎を、愛琉志は優しい先輩の顔で見守った。
長い時間、彼らを見ていたのだ。珠闘麗斗にそっけなくされると、新九郎は一瞬だけ寂しそうな顔をすること。珠闘麗斗は珠闘麗斗で、あれやこれやと言いつつも新九郎が気になる様子なので見て取れること。
外野が口を出すものでもない、と思っていたが。今こそは。
「まだもう少し時間があるからさ、シンちゃんなりに考えて、答えを出して、それをちゃんとスーちゃんに伝えてみな。ちゃんとした場で、ね」
「そっか…そうだよな…ありがとう、ナルさん！」
何かを決意したのか、新九郎の瞳が輝きを見せた。

【二月　卯花惣輔と百目鬼珠闘麗斗の場合】

「……なんだこれは」
「見てわからないか。卯花家特製のお惣菜セットだ」
「そんなもの知らん。私は、なぜ貴様が許可もなくこの二階に上がってきているのかと聞いている」
卒業にあたっての答辞の準備をしていると、部屋の扉がノックされ、開けると割烹着姿の惣輔がいた。
手にはお弁当箱を持っている。
「答辞の準備で根を詰めていたところだろうから、夜食を持ってきてやったんだ」
「頼んだ覚えはないが？」
「まあそう言うな。とりあえず中に入らせてもらうぞ」
惣輔はそう言うとずかずかと中に入り込んできた。その強引さを無碍に断ることもできず、そして、手に持っている弁当箱からそれとなく食欲をそそられる香りがしており、つい気を引かれてしまったのも事実だった。
物怖じする様子もなく部屋の中に入った惣輔は、室内にあるテーブルの上に弁当箱と箸を並べた。そして、呆気にとられる珠闘麗斗の方を見る。
「茶ぐらいはあるかと思って持ってこなかったのだが」
「……」
その瞳の圧に反抗心を起こすこともできず――というより、母の圧を感じたときのような感覚になり、ため息をつい

て常備してある茶を二人分用意する。

「…これは、なかなかうまいな」

「そうか、口にあったならよかった」

惣輔が持参してきた惣菜は思いの外美味かった。日頃あまり口にしない、いわゆる「庶民の味」であるものの、その素朴な味付けがかえってどこかほっとする。

新九郎たちがいつも楽しそうに弁当箱を抱えているのもわかるような気がした。

「…で、これをわざわざ私に持ってきた理由はなんだ？」

「同じ寮で過ごした馴染みだ。卒業前に一度ぐらいこういう機会があってもいいだろうと思ってな」

「ならばせめて事前に一言言ってからが筋だろう」

「それもそうだったな」

言葉とは裏腹に、本当にそう思っているのかよくわからない様子であっけらかんと言う。この男はいわゆる天然なのだろうか？と珠闘麗斗は疑問に思いながら惣菜をひとつ口に運んだ。

思えば、この寮の二階を改築して住み始めた頃から、惣輔らと新九郎が仲睦まじくなっていく姿を目で追っては内心複雑な想いを抱いていた。

学校から近いから、などとは言い訳だった。無論、時間を無駄にしないために学校近くの寮を求めていたのは事実だ。でもわざわざここにしたのは新九郎がここに入ってくると聞いたからだ。

近くにいたい、けど、距離を置きたい。

複雑な心情のまま、階下で新九郎が卯花惣輔や酸ヶ湯愛琉志に後輩として可愛がられる様を見ていた。

新九郎と、いえば…

「…俺のこと、好き？」

新九郎に唐突にそう問いかけられたのは数日前のことだった。手を重ねた状態で、いつもように真剣な、それでいて、少し懇願するかのような顔で。

脳内が混乱して、すぐには返答ができなかった。

その質問はどういう意図なのか。

今この状況で急に聞いてきたのは何故なのか。

心の準備も整っていないのに…

困惑していると、「ごめんスーさん、今のは忘れてくれ！」と謝られてそのまま今に至る。

言われた側の珠闘麗斗は、その質問に対する自分がすべき

適切な対応が思いつかず、悶々とした時間を過ごしていた。
気がつけば互いに惹かれ合って信頼しあっていて、必要としていた。
無論、自分たちの絆も、だからこそ強固なものだとは信じているが。

「新九郎とは、その後仲良くやれているのか？」
「…き、貴様には関係ないだろう」
「大いに関係ある。なぜなら俺はマミーだからだ」
「何を言っているんだ貴様は」
珠闘麗斗は、心を読まれたのかと少し焦りながらまた一口、惣菜を口に運んだ。
幼い頃に母が故郷の味だと言いながら作ってくれた料理を思い出し、少し暖かな気持ちになる。そして、心の壁も少し取り除かれたような。
「…胸の痛みを、感じなくなったんだ」
箸を止め、珠闘麗斗がぽつりぽつりと言葉を紡ぎ出した。
「私にとってはそれだけでも十分だった。共にいれるだけで。でも…あいつが、あんなことを聞くから…」
好きかどうかなどどうして今更聞くのか。無論、幼馴染としての好意は言うまでもないことで、それはお互いわかっているはずで。
じゃあ、その問いかけの「好き」は。
いつも元気でいてほしいとか悲しい想いはしてほしくないとか。隣にいてほしいだとか自分が一番でいたいだとか。
…そして、できるなら、握った手を握り返して欲しいとか。
自分の中で確かにある葛藤や煩悩とは、これからゆっくり向き合っていけばいいと思っていた。未来は明るく開かれているのだから。
今答えを出してしまうのは。互いに答え合わせをしてしまうのは、性急なのではないか。
焦って、誤解して、またすれ違ってしまわないか。

「何があったのかは知らないが、あまり深く考えずに素直になればいいんじゃないか？」
黙って珠闘麗斗を見守っていた惣輔が口を開いた。
「…素直に話をしないと、あらぬ誤解も生まれる。ありのままを伝えれば、新九郎は全て受け入れる」
惣輔の脳裏に初めて新九郎と出会ったときの情景が浮かぶ。好奇心旺盛で、出会う様々なものにキラキラと瞳を輝かせる男。大きな口を開けて笑ったかと思えば、時折アンニュ

イな顔も覗かせる不思議な後輩。
「……」
「不要なこだわりなど捨ててしまえばいいだろう。素直になれ、百目鬼。俺はお前達のことは応援しているぞ」
思いがけない暖かい言葉に思わず珠闘麗斗は顔をあげて惣輔を見た。
眼鏡の奥の瞳が優しい色を浮かべている。
「なんせ俺は黒玉寮のマミーだからな。…卒業しても」
惣輔は冗談なのか本気なのか、判断のつきにくい表情で飄々とそう言い、湯呑みを持って茶を一口飲んだ。
その様子をまじまじと見つめた後、珠闘麗斗はふんと鼻を鳴らした。
「…卯花惣輔、それを言いたくてわざわざ惣菜まで作ってここに来たのか」
「まあそれもあるが、卒業前に一度ぐらい俺の料理の味を味あわせてやりたかったというものある」
数秒間、二人は見つめ合った。
同学年で同じ寮生で、決して仲が悪いわけではないが、互いの境遇から積極的に仲良くなろうともしてこなかった二人だった。
新九郎という共通項がなければ、ただの同級生として、大した会話もなく高校生活が終わっていたかもしれない。
しかし、縁あって今こうして話をしている。
惣輔の瞳は、本心は読み取れないものの、それなりに自分のことを思っていてくれているのはわかった。
やはり惣菜などはただの言い訳だったのだろう。
「…ふっ。まあいい。これ、美味かった。礼を言おう」
「どういたしまして」
そのあとは、とりとめもない会話をぽつりぽつりと交わしながら箸を動かすだけの、穏やかな時間が流れた。

【三月　酸ヶ湯愛琉志と卯花惣輔の「卒業」】

肌寒さを感じて愛琉志は早々に目が覚めた。まぶたを開くとすぐ近くに、まだ眠っている惣輔の寝顔があって、昨晩同じ布団で寄り添うように眠ったのを思い出す。
卒業後も共に、と約束をしてからやっと、互いの関係を改めて確かめた。言葉にするでも約束をするでもなく、自然とそばにいることを望んでそうしてきた三年間だった。わざわざ言葉にしなくてもそうしあえる信頼関係が二人にはあり、その信頼関係を築ける環境もあった。
ようやっと今、互いの関係を「恋人」と確かめあった。

「…愛琉志？」
もぞりと動く気配がして、まだ半分眠っているような声がした。顔を上げれば、とろんとしたまぶたでこちらを見る惣輔がいる。
「起きちゃった。けどまだ早いから、ソーちゃんはもう少し寝てな」
「ああ…」
またも寝惚けたままの返事が聞こえてきて、赤子を抱くようにきゅっと腕で体を寄せられる。
されるがままに抱きしめられながら、じっとその温かさに身を委ねる。昨晩からずっと肌は触れ合ったままだった。その暖かな温もりはまだ生々しく残っている。

三年間、惣輔に精神的に支えられてきた。
だが、とふと愛琉志は思った。
惣輔は普段から思い切りが良く、悪く言えば特に深く考えない性格でもあるが、あまり悩むことがない。しかしその惣輔が少し前までは落ち着かない様子だった。
それは、惣輔自身も、いろいろと思うことがあり、人知れず悩んでいたのではないだろうか。
だとしたら、日頃甘えてばかりの自分が今度は惣輔を支えるべきではないのだろうか。

「ねえ、ソーちゃん」
声を掛けて額をつんつんと指でつつく。すると重たげな瞼が開く。
「ん、…どうした？」
「今日、学校、サボっちゃわない？」

カフェー黒猫の店員は、明らかにそわそわしている若者と、開き直ったようにニコニコとしている若者との組み合わせを見ても、特に何も言わなかった。
それがかえって惣輔には恐ろしく感じ、緊張のあまり目を合わせられない。
注文を受けた店員が奥へ入ったあとにようやっと惣輔はひとつため息をついた。
「まさか俺が高校生活においてこんなことをするとは…」
「ええ～、いいじゃん！一度ぐらい、これぐらいの悪さしちゃっても、ソーちゃんの美しさは揺らがないよ」
学校をさぼってカフェーに行こうと誘ったのは愛琉志だった。美しさが揺らがないのなら愛琉志はときたま学校をサボったり行事をサボったりしていたが、惣輔は当然真面目なのでそういったことはしたことがない。
しかし卒業間近の今、一度ぐらいは少しサボるぐらいあっ

てもいいのではないか。それが惣輔にとって息抜きになるのか否かは別として。

店内が空いているからか、それほど待つこともなく注文したものは運ばれてきた。バニラアイスの浮かんだ、きれいな緑のメロンソーダが2つ。テーブルの上に置かれたそれに二人は目を輝かせる。

「サボタージュというのも案外楽しいものだな。愛琉志と出会わなければ、こんな経験はすることもなかっただろうな。感謝している」

「ソーちゃんは真面目だもんね。でも俺ちゃんだって、ソーちゃんがいなかったら遠泳大会だって参加しなかっただろうし。高校生活の思い出が減っちゃってたかもしれない」

「お互い様、というわけだな」

バニラアイスを口に運び、メロンソーダを流し込む。バニラの余韻が残る舌に炭酸が重なり、独特の味わいが口いっぱいに広がった。

同じものを食べて同じ想いを抱えながら、見つめ合って微笑み合う。

たくさんのときを共に過ごしてきた。

違うところも多い二人だからこそ、きっかけがなければただの同窓生のまま卒業したかもしれない。

「…ねえ、ずっと疑問に思ってたんだけど」

「ん？どうした？」

愛琉志は、ふと、空太と交わした会話を思い出す。

「俺ちゃんはさ、みんなの人気者だったでしょ？信奉者もたくさんいて…そういうのさ、ソーちゃん的にやきもち焼いたりは一度もしなかったの？」

美男子コンテストでたくさんの票を集め、信奉者達にちやほやされても、惣輔は特に動じることもなくむしろ安心したような顔で微笑んでいた。

人気者の自分のことを、独占したいと思わないのかと疑問だった。逆の立場だったら、おそらく自分は嫉妬心と独占欲で苦しくなるだろう。

「やきもち…？」

惣輔は心底不思議そうな顔をした。

「愛琉志が容姿も中身も美しいのは俺もよくわかっているし、それに惹かれる人がたくさんいるのは当然のことだ。俺はむしろ嬉しいし、誇りに思っていたぐらいだぞ」

嘘偽りない本心だった。

持って生まれたものが良いのは前提として、愛琉志が常に、その外見も中身も美しいままでいようと相応の努力をしているのを惣輔はすぐ傍で見てきた。

見てきたからこそ、その努力があるべき姿で報われているのは惣輔にとっても嬉しいことだった。
それに加え、嫉妬心など抱かなかったのは、今月も優勝したのだと嬉しそうな愛琉志の顔を一番近くで見れるという特権があるからかもしれなかった。
「ソーちゃん……ソーちゃんって、やっぱ、美しいよ…」
愛琉志は感動すら覚えながらそう言った。
出会ってからもう何度目だろうか。そのように思うのは。
美しくあるために、自分が自分を愛し好きでいられるように相応の努力はしてきた。しかしちょっとしたことで自信を失うこともあるし、落ち込んでしまうこともある。
そんなときに必ず諭したり励ましてくれるのが惣輔だった。
間違った道に進みそうになったら身を挺して止めてくれる。自分の美しさを飽きることなく毎日肯定してくれる。自分の努力をちゃんと知ってくれている。
さきほど、惣輔に甘えてばかりではいけないなと思ったばかりだが、やっぱりこれからも甘えたい。
そしてできれば、こうやって隣で甘えていい存在は、自分だけでありたい。無論、かわいい後輩たちは許してやってもいいが。
「卒業しても、ずっと一緒にいようね、ソーちゃん」
「あぁ、もちろんだ、愛琉志」
性格も価値観も異なるが、だからこそお互いにジグソーパズルのようにうまくハマって、居心地が良い。
すれ違いそうになるときは、これからだってあるかもしれない。居心地が良いからこそ、なあなあになってしまうときだってあるかもしれない。
けれども、自分たちなら大丈夫。
これからだって、手を手を取り合い、隣にいれる。
口には出さずとも互いにそれを確信しながら、メロンソーダは減っていく。

【三月　乳頭左門と猫魔祐の「卒業」】

「祐！探したぞ！」
騒がしい足音がして部屋のドアが豪快に開かれた。驚いた祐は振り返り、慌てて頬を赤くする。
「急になんですか…」
「祐！某から話がある！大事な話だ！」
そう言いながら左門はずんずんと部屋の中に入り、椅子に座り静かに読書をしていた祐に近付く。
怒鳴り返す気力もないほど面食らった祐は、近づいてきた

左門を避けることもなく椅子に腰掛けたまま。
「祐…愛だ！」
「はあ？」
左門は祐の両肩を正面から掴み、瞳をキラキラとさせながらそう言った。
「いきなりなんですか…ついに気でもおかしくなりましたか？」
「気など狂っていない！某は今、わかったのだ！確信したのだ！」
呆れる祐をよそに、左門は嬉しそうに声を張り上げる。
そのままその場に片膝をつき、椅子に座ったままの祐を見上げる形になる。
長い睫毛にふちどられた翡翠色の瞳がきれいで、思わず祐は声を出せなくなった。
膝に置いた手に左門の手が重ねられる。
日頃から剣術を行っているせいか、自分のものよりどこか厚みと硬さを感じる手。
「先日は、某の気遣いが足りず申し訳なかった」
「…なんのことだかわかりませんね」
「デートの日のことだ！」
ぎゅっと手が握られて、祐の心臓がどきりと高鳴った。あの日は、少し調子に乗ってしまっただけ。つい欲が出てしまっただけ。期待をした自分が愚かだったのだと流そうとしていた。
なのにこの空気読まずな先輩は、そうさせてくれない。
「祐、某と愛を紡いでみないか？」
「…は？」
左門は優しく微笑む。
「某と祐は、共に、殿を支える同志だ。運命共同体だ。…しかし、それ以上に、某は、祐と二人の歴史も作っていきたいと思っている」
握られた手の温もりが心臓にそのまま伝わるようだった。どくどくと高鳴る心臓と、赤くなる頬。優しい笑みでこちらを見つめている左門の姿。その全てが、ささくれ立っていた心を柔らかくしていく。
「某はまだ未熟だ。祐の期待全てに答えてやれるかはわからない。しかし、誰よりもお前を愛し大切にする自信は、ある！」
左門は微笑みながらもそう力強く言う。
「そうだな…この誓いを破ったときは、切腹も辞さない覚悟だ！」
自身の放った言葉の重みを確かめるように、左門はうんうんと頷いた。その勢いに併せて腰に差している刀も揺れる。
左門の言葉の意味を受け止め噛み砕きながら、祐は全身が

熱くなっていくのを感じた。
このひとは、いつもそうだ、こうやって唐突で強引で。
でもその勢いに飲まれるのが、こんなにも嬉しい。
「…切腹、だなんて。いつもそう言っては、切腹しそびれているじゃないですか」
祐はようやっとそう漏らし、ふふ、と口元を緩めた。
「いいでしょう、僕もあなたのことは…好きですから」
緩んだ口元から自然と気持ちが溢れた。しかし今となってはそれを恥ずかしがることも否定することもしない。
ありのまま素直でいよう、と思ったのだ。
自分自身が後悔してしまわないように。
「祐…！」
優しく微笑む祐の顔を見て、左門は瞳を見開いて喜んだ。そしてそのまま、がばっと、勢いよく祐を抱きしめる。
「そうと決まれば早速殿に報告しなければならないな！我々がこれから愛し合う恋人になったということを！」
「ちょ…ちょっと、早急すぎますよ…あなたって人は…」
勢いよく抱きしめられたせいで左門の髪が頬に触れてくすぐったかった。それでもその勢いが嬉しくて、遠慮がちながらもそっと背中に腕を回す。
かつては家柄差に勝手にコンプレックスを抱いていた相手。自分のほうが優秀なのに、どうしてこの男が殿の右腕なのだ…と拗ねて苛立っていた。しかしそれは内心、自分のことを対等に見て接して欲しいという恋慕の裏返しでもあった。
抱きしめていた体が離れた。目線を上げれば微笑んでいる左門の顔があって、それはあの日を思い起こさせる。
今なら、この鈍感な先輩も、意図を察してくれるだろう。
言葉で求めるのは照れくさく思い、祐は瞼を閉じた。意図は今度こそ正しく察してもらえたようで、大きな体で優しく抱きしめられ、唇に柔らかな感触が重なる。触れあったそこから、なんだかすべての負の感情が溶けていくような気がした。
数秒重なった後に顔が離れる。目を開けると、困ったような顔をして祐を見守る左門の顔があった。
「…せ、接吻とは、こんなに、その…」
恥ずかしいのか、やや目を逸らしもじもじとしている。
祐の瞳にはその姿もなんだかいじらしく見えた。可愛い人ですね、と心の中で呟く。
重なった唇の柔らかさに胸を高鳴らせているのは祐も同じだった。そして同時に、もう一度、と内心求めているのも。
「…幸せ、ですね」

そう小さく呟き、今度は自ら左門の唇に己の唇を重ねる。少し背伸びして、ふくらはぎの筋肉の伸びる感触すらもなんだか嬉しい。

数日経った、卒業式間近なある日。

二人は街に繰り出して珠闘麗斗への卒業祝いの品を探していた。

街中ということもあり、手こそ繋がないものの、ああでもないここでもないと品を見比べながら、さりげなく身を寄せて、恋人同志の距離感を楽しむ。

「いい買い物ができてよかったな、祐！」

「ええ、これなら百目鬼會長も喜ぶでしょう」

互いを想う関係性でありながらも、同じ人を慕う同志でもある。もうじき卒業を迎えるその人を思い浮かべ、背中を追ってきたこれまでのことを思ってどちらともなく微笑み合う。

「そうだ、祐……その、もう一件、寄りたいところがあるのだが構わないか？」

「ええ、構いませんよ」

左門が珍しくそわそわとした様子を見せていた。それを不思議に思うも、祐は左門の行くがままに着いていった。

辿り着いたのは時計屋だった。中に入ると、気難しそうな白髪の店主がじろりと二人を睨む。しかし左門はその視線など全く気にしていない様子で、ぐいぐいと店内で進み店主の前に立つ。

「乳頭左門だ。先日頼んだものは、出来上がっているか？」

左門がそう声をかけると店主は眼鏡をくいと上げ、静かに頷いて店の奥へと入っていく。そして出てきた時には、何か箱を抱えていた。

「注文通り、刻印もしてある」

無愛想なその店主は低い声でそう言うと、箱の蓋を開けた。その中に入っていたものは、懐中時計が———ふたつ。

「…名前」

金色の縁にチェーンのついた、それほど大きくはない懐中時計。時計盤を囲む縁の右下に、片方には「TASUKU」もう片方には「SAMON」と刻印が刻まれている。

「…その、某たちの、記念になるかと」

左門の方を見ると、恥ずかしいのか少し目をそらしながら頬を染めている。

その左門と、目の前にある、刻印入りの懐中時計を見比べる。

名前入りの、お揃いの懐中時計。

これから共に時を刻もうという意思のように見え、祐の頬

が熱くなる。
「…あなたにしては珍しく、粋なことをするじゃないですか」
「む、珍しくか！　はっはっは、某はこう見えてできる男なのだ！」
照れ隠しの皮肉が伝わったのか伝わらなかったのかわからないが、左門は嬉しそうに声を出して笑った。
その様子を見て祐もまた、優しく微笑む。
お揃いの懐中時計。これから隣に立ち共に時を進んでいく二人。
これほど嬉しく誇らしいことはあるだろうか。
まるで自分がここにいるのは忘れているかのように幸せそうな二人を見て、無愛想な店主は、こっそりと苦笑いをした。

【三月　長万部潮と阿蘇空太の「卒業」】

左門と悩みを打ち明け合い、解決したようで勢いよく向かっていった左門を見送ったあと、潮も覚悟を決めて空太のもとへ向かった。
寮に戻ると、空太が何か考え事をするかのように窓際に座り外を見つめていた。部屋に入ってきた潮に気付くと、ぱっと頬を赤らめる。
「…空太、ごめん。この間の件から、曖昧にして、…悪かった」
もう言い訳じみたことは言わない。そう覚悟を決めた潮がまっすぐに空太の目を見て言葉を紡ぐ。
とはいえ、まだ不安はある。平凡な自分が、無個性な自分が、向き合えるのかという不安は。
でも、そんな不安よりも、後悔のない未来へと進みたい。
「……ボクこそ、ごめん…急に」
潮が何かを言い出す前に、空太が先に言葉を紡いでいた。いつもの強気な様はなく、しおらしい様子を見せ、両手の拳はぎゅっと握っている。
「どうしても、確かめたくて」
「確かめる…？」
潮は不思議そうな顔をした。空太は一瞬口ごもり、意を決したように再び開く。
「ウッくんはボクに接吻されて、嫌だった？」
「そんな…嫌なわけない、むしろ…」
今にも泣きそうなうるんだ瞳の空太に見つめられ、潮はたじろいだ。
あぁ、こんな風に思っちゃいけないのに。

泣いてる顔を見たいわけじゃない、悲しませたいわけでもない、ただ、でも、どうしても、この、目の前にいる、この一年間一番多くの時間を共にした少年に、どうしようもなく

「…空太は、見てると、愛しくて、食べたくなっちゃうから……」

「…え？」

愛しくて、という言葉を聞いて空太の頬がほんのりと朱色に染まる。

潮はぐっと拳を握りしめて近づいた。正面に座って空太の両頬を手で包む。

掌に伝わる肌の温度はほんのり暖かく、その暖かさが紅潮した自分の頬のせいなのか添えられた手の温もりなのかもう空太には判断がつかない。

「…自分でもわからなくて…どうしてこんなに食べたくなっちゃうのか…。全部、知りたくなっちゃうのか」

困ったように下がる眉で、今にも泣きそうな顔をして潮が言葉を連ねる。

「…答えがわかんないから…説明が、できないから…けど」

「…ウッくん」

「これが…答え」

両手で頬を包んだまま、潮は意を決して唇を重ねた。瞳は閉じるものだと知っていたから、唇を近づけると同時に瞳は閉じて、空太がどんな顔をしていたのかわからない。

ただ、嫌がられることも抵抗されることもなく、あの日のように、柔らかな部分だけが重なっている。思わずそのまま噛みついて捕食したくなる衝動にかられるが、ぐっとこらえて耐え、ただ、説明のつかないこの想いが伝わりますようにという祈りを抱く。

数秒そうしていただろうか。そっと唇を離して瞳を開くと、頬を染めて嬉しそうに微笑む空太の顔があった。

「……ザコうーくんのくせに、かわいいとこあるじゃん」

その空太の声音がいつもと変わらないことに、潮は安心感を覚えた。

いつもの空太だった。ちょっと小憎たらしいのに、なぜか憎めなくて、愛しくて、独占したくなる。

「どうせ自分はザコだよ…好きの理由ひとつ、ちゃんと説明できないんだから…」

「ううん、いいんだよ。それでいいの」

空太は嬉しそうに瞳を細め、今もなお両手を包んでいる潮の手に自分の手を重ねた。

「こんなにカワイイボクと四六時中一緒にいたら、好きになっちゃうのなんて当たり前だもんね」

――こんなにカワイイウーくんと一緒にいたら、好きにな

っちゃうのも当たり前なんだよね。
空太は心のなかでそう独り言を言う。

好きの理由を説明できないのは空太も同じだった。
笑顔でご飯を食べる顔を見ると嬉しくなる。さりげないところで優しさを発揮してくれると、その優しさは自分だけが独占したいと思えてくる。
――言わないけど、ね
言わずにただ行動でだけ示すのは、潮の心を弄びたい悪戯心だった。
もう一度、今度は空太から潮の唇に、噛みつくように口付けをする。今度は少し悪戯心を増して、一度離してから角度を変えてもう一度。上唇と下唇で潮の唇を挟み込む。いつもの捕食の仕返しのように。
「……それ以上したら、止まらなく、なるかもしんない」
潮の手が無理やり剥がされた。紅潮した頬で顔を背け、拒否をするかのように空太の唇に指を添えている。
「食べたくなった？いつもみたいに」
「…煽るなよ、わかってるくせに……」
「もうちょっとだけ、我慢してね」
唇を抑える指の感触を愛しく感じていた。欲望と戦いながらも、ちゃんと我慢して触れないようにしている潮が愛しい。そして同時に、甘えたいような意地悪な心も沸いてくる。やっぱりまだもう少し、焦らしていたい。
焦る必要など無いと感じていた。自分たちには、これからもまだまだ時間がある。

「長万部って、最近、阿蘇のこと噛みつかなくなったよな」
「へ？」
授業終わりの掃除の時間、クラスメイトが潮にそう声をかけた。
箒で隅の埃をつついていた潮は思わず手を止めた。
「いや、前まではさ、腹が減った～とか言って、よく阿蘇に噛みついてただろ？」
「あぁ…」
言われてみれば、と潮は振り返る。そういえば以前のように頻繁に空太に齧りつくようなことはなくなっていた。
噛みつく代わりに、手を繋いだり、頬に触れたりするのが増え、それで心が満たされるようになったからだった。
「さすがに人肉食うのは飽きたか」
「うん…まあ、そんなとこ」
特に気に留めた様子のないクラスメイトは、そう言って笑い、会話は自然と取り留めのない話題へと移っていく。

潮は上の空で返事をしながら、自分の心情の変化を不思議な気持ちで受け止める。
あの荒っぽい、食べたくなる衝動。それがこうも穏やかで優しいものに変わるなんて。

「…うん、おいしくできた！」
一足先に黒玉寮に帰ってきていた空太は、炊事場に立って夕飯作りに勤しんでいた。
惣輔が卒業してしまったら炊飯は自分の担当になるのだろうと思っているので、最近はこうして空太自ら炊事場に立つようにしていた。
味見をしてみると我ながら上出来な出来栄えだった。早くみんなに食べて欲しいな、と思いながら窓越しに外を見つめる。
夕日の光が窓を通り越して部屋を橙色に染めている。その暖かな日差しがなんとなく潮を思い起こし、それがおかしくなってふっと空太から笑みが溢れる。
「一人で笑うぐらいおいしいのか、それ」
不意打ちで声が聞こえたと思いきや、横からひょいっとてが伸びてきて、作ったばかりのおかずを指が掴んだ。
「あ、こらウッくん！つまみ食い禁止！」
「いいじゃないか別に、今食べるか後で食べるかなんだから」
そう言って潮はおかずを口に運び、おいしい、と小さく呟いて口元を綻ばせる。
「もー、お行儀悪いよ？」
口ではそう言いつつ、今潮から小さく聞こえた、おいしいという言葉が嬉しい。
「もうちょっとだけ食べていいか？」
「だーめ！」
凝りもせず再びおかずに伸びる潮の手首をきゅっと握って静止した。このじゃれ合いのようなやりとりも、愛しくて嬉しい。双方がそう思っていた。
「…そういえば今日、クラスメイトにさ、最近空太に噛みついてないよなって言われて」
「うん？あぁ、言われてみればそうかもね」
会話を交わしながら、空太は自身の手を潮の手の指に絡ませる。
「…こういうの、増えたせいかも」
絡まった手に力を込めてぎゅっと握り示唆をする。
空太は言葉では返事をせず、いたずらっぽく笑みを浮かべ、繋いだ手をにぎにぎとして弄んだ。
「いいことなんじゃない？噛みつくよりずっと、痛くないし

健全だし？」
「それは、まあ」
「…ボクも、その方が嬉しいしね」
そう言って空太は握る手にきゅっと力を込め、甘えるように潮の肩に頬を寄せる。
潮はそれに応えるように空太の髪を優しく撫でてやった。
目の前のおかずは、後でいいやと思いながら。

【三月　雲仙新九郎と百目鬼珠闘麗斗の「卒業」】

卒業式は滞りなく終わった。
新九郎と待ち合わせの約束を交わした場所に行くのは予定より時間がかかった。普段なら生徒会長とやや距離を取っていた同輩や後輩たちが、次から次へと珠闘麗斗に声をかけてきたからだった。
これが最後の機会になるからと。
この三年間で成し遂げたものが数多くあったのだと改めて自覚する良い機会になった。感謝、憧れ、敬意、数多の感情を抱く者たちが最後の機会と珠闘麗斗のもとにやってきた。
ようやっと一通りの囲いがすみ、校内に残る人影もやや減った頃、珠闘麗斗は新九郎に呼び出された裏庭の桜の元へと向かった。
胸が少し高鳴っているのは、遅れを取り戻すため小走りで来たからだろうか。
はやる気持ちを抑えて約束の場所に来るも、新九郎の姿はなかった。
きょろきょろとあたりを見渡すが、人の気配はない。遅くなってしまったから待ちくたびれて帰ってしまったのだろうか、と不安な気持ちが珠闘麗斗を襲う。

「スーさんっ」
背後からいつもの声がして、ひょっこりと横から顔をのぞかせたのはその待ち人だった。いつものように無邪気な表情で、にっこりと微笑んでいる。
「すまない、いろいろと声をかけられてしまって、遅くなってしまった…」
「気にしなくていいぜ！それより、ちゃんと来てくれたのが嬉しい！」
そう言って新九郎は心底嬉しそうに瞳を細めた。
その無邪気な笑顔がまた愛しく想い、こうして素直に互いに話ができるようになった喜びを改めて確かめる。
「…まずは、スーさん、卒業おめでとう」

新九郎はめずらしく真面目な、改まった顔をしてそう言った。
「…あぁ。ありがとう。生徒會長として悔いなく、無事にこの日を迎えられてよかった」
「へへ、スーさんは相変わらず真面目だな！」
新九郎はそう言って嬉しそうに笑い、直後にスッと真剣な表情になった。
「…スーさん、改めて、伝えたいことがあるんだ」

いつになく真剣な新九郎の表情を見て、思わず珠闘麗斗は胸がどきりと高鳴った。
卒業式の日にと約束したときから、うっすら、感づいていた。感づいていても、期待はしすぎないでいようと、考えないようにしていた。
もう今、この場では、逃げられない。
新九郎の真っ直ぐな瞳が珠闘麗斗の心を捉えて離さない。
「俺、当たり前のように、これからもずっとスーさんと一緒にハイカラな未来を作っていけるって、信じてて」
「…あぁ」
「その気持ちは今も、これからも、変わらないんだ。変わらなくて…」

珍しく、新九郎が言葉に詰まり口ごもった。
少し眉根を下げ、迷うような表情をしている。
「新九郎？」
珠闘麗斗が迷う様子の新九郎の手を取ったのは、もはや無意識での反応だった。
あの日、手を引かれ町へと連れ出されたように、今度は珠闘麗斗が新九郎の手を握り、ぎゅっと力を込める。
「…俺、スーさんの…」
握られた手にもう片方の手を重ねる。思っていることを伝えるのにこんなに勇気がいるなど、新九郎にとっては生まれて初めてだった。
好きをぶつけて、相手から答えてもらえなくても、そんなの気にしない。誰に対してもそうだったのに。
珠闘麗斗に対してだけは、今は、伝えて、もし万が一、受け入れてもらえなかったらと怖い。
けど、今こうして握ってくれている手の温もりは、確かな答えとしてすでにある。
「…俺、スーさんのことが好きだ。それは…スーさんだけは、特別で…。できたら、スーさんも俺のことを特別に思ってくれていたら嬉しいなって…。だから…ただの幼馴染じゃ

なくて…特別になりたい。恋人、に」

意を決して珠闘麗斗の方を見上げて言葉を放った。

新九郎にしては珍しく、やや歯切れの悪い言葉。しかし、精一杯の、伝えたい想い。

どうか受け止めてほしい。

今までだったら、誰に対しても、一方的な好意でも気にしなかった。けれども今、この想いだけは、珠闘麗斗に拒絶されたくない。そんな感情が新九郎の中で生まれていた。

意を決して顔を上げ、飛び込んできたその視界の中では、嬉しそうに優しく微笑む珠闘麗斗が、まっすぐ新九郎を見つめている。

「新九郎…私も、同じ気持ちだ。たぶん、本当は、ずっと昔から」

期待をしていた通りの言葉が新九郎から伝えられ、珠闘麗斗の心のうちで、わだかまっていたものが全て溶けていく。

世界が文字通り虹色に輝くような心地だった。

「本当は…ずっとそばにいたかったんだ…。追いかけて来てくれたときは、内心嬉しかったし、もっと早くから、ずっと、同じ時間を共に過ごしたいと思っていた。恥ずかしい話だが、その…お前のまわりの人間が羨ましかったこともある」

珠闘麗斗はもう感情を包み隠さなかった。

「だから…私もだ、私も、お前と特別な…恋人になりたいと思っている」

互いに同じ気持ちであることを確認できる喜び。これから二人で「特別な存在」「恋人」として未来を作り上げていける喜び。それらで胸がいっぱいだった。

「スーさん…！俺、嬉しいぜ！」

新九郎は高らかにそう声をあげ、飛びつかんばかりの勢いでぎゅっと珠闘麗斗を抱きしめた。

珠闘麗斗は反動でよろけそうになるも、慌てて足を踏みしめ、同じように新九郎の背中に腕を回す。

桜の花びらが舞う中で、互いにぎゅっと抱き合う。

腕の中にある確かな感触と温もりをそれぞれが噛み締めていた。

「…へへ、なんか、改めて考えると、照れるな！」

抱き合っていたのを解き、新九郎は照れくさそうに笑んだ。

「私もだ…しかし、…こ、恋人になるということは…これから、こういう触れ合いも増えるということだから…慣れてい

かねばだな」
「触れ合い？それってたとえば…こういうこととか？」
新九郎はそう言って不意打ちを狙って珠闘麗斗にの首に両腕を回し顔を近付けた。
今にも唇が触れそうな距離で、互いの瞳の中に互いの顔がいっぱいに映る。
「なっ……きゅ、急に……」
視界いっぱいに広がる新九郎の顔に、珠闘麗斗は動揺した。
心臓がばくばくと音を立て、胸いっぱいに期待が広がってしまう。
「…なーんて、こういうのは、もっとちゃんとした状況でする方が、ハイカラだからな！」
けらけらと笑いながら新九郎の体が離れる。
接吻をされるのかと期待したにも関わらず焦らされてしまい、珠闘麗斗は思わず恥ずかしさで頬を染めるが、嬉しそうに楽しそうに笑う新九郎を見てると簡単に許してしまった。
「まったく…年上をからかうなよ、新九郎」
「スーさん、赤くなってかわいいぜ！ほら、みんなも見て笑ってる！」
「…みんな？」
楽しそうににこにことしている新九郎が指をさした。その方向に顔を向けると、左門や祐たち六人が、なにやらニヤニヤとした表情でこちらを見ていた。
「なっ……いつから！？」
「ついさっき！俺には見えてたけど、スーさんの角度からはわからなかったよな！」
「そ、そういうことは早く言え！！！」
「慌てるスーさんもかわいくて好きだぜ！」

少し離れた場所から見守る一同たちは、仲睦まじい二人の様子を嬉しそうに見守っていた。
恥ずかしく思いながらも、新九郎からあまりにも直球に伝えられる好意や、さきほどの接吻しそうな距離感のときめきを思い出すと、怒りもどこかへ消えてしまう。
まあいいか、と珠闘麗斗は思った。
結局は、新九郎のそんなところまで含めて、愛してしまっているのだ、と己を振り返り自嘲する。
「待たせているようだから、行くぞ、新九郎」
「おう！スーさん！」
皆のもとへ、二人は共に並んで歩き出す。

【「卒業」】

「改めて見ても、趣深くて美しい寮だねえ」
「あぁ、俺達が来た日から変わらな…いや、一度破壊されて猫科学で再建されたから、変わってはいるか…見た目は全く変わってないが」
「馴染み深いそのままがいいかと思いまして、そのままにしたのでありまヌル」
いよいよ3年生達が寮を出る日、全員が集まっていた。
全員というのは、寮生たち8人――だけでなく、マヌルネコのヌルやプレーリードックのマスターキャン、そして馴染み深いもう一人もいた。
「ボクもわずかな時間とはいえ、この寮で過ごせたことは良い思い出…いや、良い思い出…かな？」
「あぁ、ラクさんと一緒にお泊りしたのも懐かしいな！」
様々な出来事を走馬灯のように思い出して苦笑いを浮かべる楽愛に対して、新九郎は嬉しそうな声を上げている。
「はっはっは！某たちの住む二階は、マスターキャンの力のおかげで以前より華やかになったがな！」
「やはり僕達のような高貴な者は、より高みを目指してこそ…ですからね」
「はぁ…たすくんの嫌味攻撃にも、この一年で随分と慣れて何とも思わなくなっちゃったよ」
「まあ、普通にちょっと羨ましいけどね」
これまでと変わらない、馴染みの者たちの会話を、珠闘麗斗は感慨深い気持ちで微笑みながら見守っていた。

今日、三年生の三人はこの黒玉寮から去る。
荷物は全て運び出し、部屋の掃除もみんなで協力して終わらせた。もうすっきりと去れるのに、皆、名残惜しいのかこうして黒玉寮の前で集まって動けずにいる。

「いろんなことがあったよなぁ、なあ、スーさん！」
「あぁ、本当にそうだな」
新九郎はそう言って自然な流れで珠闘麗斗の肩に手を置いた。
穏やかで平和で、つい数ヶ月前までは互いに防衛部と征服部として戦っていた敵同士には見えなかった。
楽愛はあれから時折現れるようになった。地道でも真っ当な方法で鳥が愛される未来を作るのだと言い、ほうぼうに飛び回っているが、ここに帰ってくるとどこか安心する。
しかし…と楽愛は周囲の者たちを見渡して心の中で呟く。
しばらくぶりに顔を見たが、なんだか皆、各々心が満たさ

れているように見える。憑き物が落ちたような。
なにか良い変化でもあったのだろうか、と疑問に思うが、問いかける前に新九郎に腕を引っ張られた。
「みんなで記念写真を撮ろうって話になってるんだ。なんか未来のすげー機械があるらしいんだ。ラクさんも一緒に写ろうぜ！」
「特別に未来から送ってもらった「かめら」だキャン！」
マスターキャンはそう吠えながら、自身の体より大きなカメラを重そうに持ち上げた。
カメラ置き用の台を設置し、そこにカメラを置いた。黒玉寮を背景に9人と一匹が並び、全員きちんと入っているのかはマスターキャンが確認した。
「十秒後に撮られる仕組みキャン！目を閉じるでないぞ！」
そう言って小さな手をカメラのシャッターボタンをぽちりと押し、慌てて走って珠闘麗斗の肩にぴょんと飛び乗る。
「3、2，1…」
カシャ、と音がしてシャッターが下りた。また再びマスターキャンがぴょこぴょことカメラ側に移動し、今撮ったばかりの写真を確認し、小さな指でぐっと親指を立てる。
どうやら無事に撮れたようだ。
「こんな機械で簡単に写真が撮れるんだな、ハイカラだ！」
「あーあ。今の時代にこれがあれば、カワイイボクの姿たくさん写真に残せるのにね」
「美しい俺ちゃんの姿もね！」
「それなら、殿の凛々しいお姿も…！」
カメラを囲んでわいわいと賑やかに話す者、それを見守る者、各々が違う形でも、でもこの場を愛しく思いながら過ごしている。
「卯花は、新居は無事見つかったのか」
「あぁ、ちょうど良い物件を契約できた。炊事場も広い」
「いいなぁ、愛琉志先輩は春からも惣輔先輩のご飯を毎日食べられるんだ…あぁ…お腹空いてきた…猫魔、さつまいも持ってない？」
「今この状況で、持ってるわけないだろう…」

皆の和気藹々とした様子を見守りながら、楽愛とヌルとマスターキャンはそっと互いに目線を交わし、微笑んだ。
かつては平和な未来のため、（という名目で）戦っていた、目の前の少年たち。彼らが戦闘服を身にまとって戦うことはもうないだろうが、この少年たちの絆があれば、自分達動物の未来も安泰なような気がしていた。
「ときに———三年生の皆様方は、そろそろ出発の時間でありまヌル」

変わらずわいわいと盛り上がる中、ヌルがそう声をかけた。その掛け声をきっかけに、8人ははっと笑い声を止める。

「そうだね、名残惜しいけど、卒業は卒業だから、美しく区切りをつけなきゃね」
「あぁ。まあ、今生の別れというわけでもないし、またいつでも来れるからな」
「あぁ、そうだな」
3年生達は三人はそう言って互いの顔を見合った。
途端に他の者達は、少し寂しそうな表情になる。

「殿…！殿になにかありましたら、某はすぐにでもすっ飛んでいく所存です！」
「會長…いえ、もう會長ではないんですが…僕も、あなたの背中をいつまでも追っていきますからね」
「あぁ。左門、祐。これからも、頼んだぞ。もちろんマスターキャンも」
「キャン！」

「お二人がいなくなっちゃうの寂しいし腹も減りますけど…けど、また絶対に寮にも遊びに来てくださいね！あ、なんなら自分もそっちに行くので！」
「カワイイボクをすぐそばで見れなくなって寂しいだろうけど、まあ、会おうと思えば会えるし？これからだってボクをかわいがってくれていいんだからね？」
「二人とも…美しいさよならをありがとう…！俺ちゃんも次会う時はもっと美しさに磨きをかけてるからね…期待してて…！」
「我が子と離れてしまうような気持ちだが……これもまた避けられない区切りだ。遠くからでも俺はお前達を見守るマミーだからな…楽愛、寮のことは頼んだぞ」
「任せておくれよ。鳥の名にかけて、皆を見守る親鳥になるよ」
「それはそれでちょっと不安でありまヌル…」

各自がそれぞれの言葉で別れを告げる中、新九郎だけは少し離れた場所でじっと口をつぐんでいた。

「新九郎？」
それに気付いた珠闘麗斗が声をかけ、皆もそちらへと視線を向ける。
新九郎は、苦笑いのような顔をしていた。
「あー、寂しいなぁ！こんなハイカラな仲間たちで過ごす寮

生活、俺は最高に楽しかった！だから、さすがにちょっと寂しい」

大きな声でそう言い、寂しそうながらも笑う。

その言葉を聞き、他の者たちも、表に出さないようにしていた名残惜しい想いが思い起こされ、口をつぐむ。

「でも大丈夫だよな、大丈夫！俺達は、これからだって絆は変わらないし、何も不安なんて感じなくていいんだ！」

新九郎は言葉を続ける。そして大きく深呼吸をして胸を張り、満面の笑みを浮かべた。

「だって、未来は――――」

END

あとがき

作者のみんです。最後まで読んでくださってありがとうございました。

アニメ内で春夏秋冬の一年が書かれた中、一年が経つということはサザエさん方式じゃなければ三年生が卒業しちゃうってことだよなぁと思い、それなら、アニメ内では書かれなかった「卒業」をテーマにしたい、そしてそれに絡めて4組のカップリングそれぞれの「卒業」を書きたい、そう思ったのは三ヶ月ほど前、温泉に浸かっている最中でした。

個人的なこだわりとして、4カプそれぞれで「卒業」の意味合いを微妙に変えています。うまく区別つけられているかわかりませんが…。

あと、カップリングではないけど「この二人がどう絡むのか見てみたいなぁ」と思った組み合わせでも絡ませています。本編では書かれなかったけどこの二人が絡んだらこんな感じかなぁと妄想しながら書くの、非常に楽しかったです。いつか本編でも何かしらの形で見れたらいいなぁと思います。アニメ2期とかアニメ2期とかアニメ2期とか…。

末筆ですが、黒玉寮は本編通り温泉地となりましたが猫科学でお隣に再建された設定になっています。ご容赦ください。

どうせWebオンリーに出るなら自分用に本にしようかなぁと思ってこういった本仕様の形にしましたが、結局は本にはしませんでした…（シンプルに間に合わなかった）

気がつけばめちゃくちゃ長い話になり、ヒエーッという感じですが、自分としてはとても楽しかったし満足しております。もしよければ、感想等いただければ嬉しいです。

改めて、今回のWEBオンリーを開催くださった主催者様、ここまで読んでくださった皆様、Pixivでいいねブクマ等してくださった皆様、本当にありがとうございました！

あなたの未来も、ハイカラでありますように！

令和八年一月十七日　みん